

ゲームが現実で、現実  
が夢になった。誰か助  
けて

大豆万歳

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

最近プリコネ2部に突入したので、ノリと勢いに任せて執筆しました。

2022/4/2 追記

某キャラのキャララストを見て創作意欲が湧いてきたので、連載に変更しました。

# 目次

弟は辛いよ	1
かくして彼らは集う	13
ジョージ・モーガンという男	28
金属製の悪夢（前編）	38
金属製の悪夢（後編）	50
設定集（随時加筆します）	71
何でもない夏休みのある日	76
急変	84
嵐の前触れ	100
混沌のランドソル	114
皇帝降臨	123



# 弟は辛いよ

「さて、次は誰かな？」

緊張が、ギルドハウスを包む。

剣を握り、挑発するような目と言葉でぐるりと周囲を見渡す金髪の女性の名はクリステイナ・モーガン。

対する少女達は武器を、拳を構えるが、動けずにいた。

原理は不明だが、こちらの攻撃は当たらず回避され、相手の攻撃は必ず当たる。

戦いに参加していない者は、加勢するか否かで躊躇い、動けずにいる。

そんな空気を破壊するように。

「ノックしてもおしー！」

何者かが扉を開けた。ノックして。と言っておきながら、実際は殴るように扉を開けると、扉を開けた人物と、その後更に2名が部屋に上がる。

扉を開けたその人物は、声からしておそらく男。身の丈およそ2M。膝まである黒のロングコートに黒の長ズボン。靴とグローブまで黒で統一されている。服の上からでもわかる、鍛えられた肉体。目深に被っていたフードを脱ぎ、針の無い時計の文字盤が

書かれた漆黒の仮面を外す。

見知らぬ男に、場にいた者たちが警戒する。

「おお、ジョージ！なぜ私がここにしていると分かった？」

ただ一人、クリステイーナ・モーガンを除いて。

「間に合ったかな？」

「間に合ったというには少し遅いですね」

「おやおや、団長に『元』副団長のサレンのお嬢ちゃんじゃないか」

ジョージと呼ばれた男性と、その同行者を見てクリステイーナ・モーガンの顔が納得したように頷く。

「お、おお、お嬢様!?!」

「ごめんなさい、スズメ。団長とジョージ君を呼んでたら遅くなっちゃって。それで、これはどういう」

「サレンさん。そこから先は俺に任せてください」

サレンと呼ばれたエルフの少女の言葉を遮り、ジョージが前に出る。

「なんだジョージ、両手に花とは随分人気者になっつ!?」

目にも止まらない速さで繰り出された手刀が、クリステイーナ・モーガンの頭頂部に炸裂。遅れて響く、鈍い音。

食らった本人は膝をつき、剣を手放して頭頂部に手を当てて呻き声を上げる。

「姉上。そのまま正座しまししょうか」

「ジヨ、ジヨージ？それなら別にチョップをしなくても——」

「姉上？」

「何でもありません」

一切の反論を許さないという圧力に満ちた言葉に、クリステイナ・モーガンが屈服する。

「……さて、そちらの狼の獣人族のお嬢さん。ビースト何があって今の状況に至ったのか、説明してもらえるかな？」

「お、おう」

く少女説明中く

「……つてことがあつたんだ」

「なるほど。……姉上」

「はい」

少女から事のあらましを聞いたジヨージは姉の方を振り向く。

「貴女は馬鹿ですか？」

「うぐう！」

容赦のない言葉が、クリステイナーナに襲い掛かる。

「何故、ただでさえ予算と人員が足りない【NIGHTMARE王宮騎士団】の騎士を連れて、【カオ自警団】のギルドハウスに攻め込むんです？そこまでして戦争がしたいんですか？平和を守る組織の一員が戦争の火種になって、それがモーガン家の者だったとか一族の恥ですよ？わかってるんですか？だいたい貴女は——」

カミソリのごとき切れ味の言葉が、クリステイナーナの心を切り刻む。クリステイナーナも反論できず、ジョージの言葉に萎れた花のように項垂れるのみ。その姿はまるで、粗相をして親に叱られる子供のよう。先ほどまでの狂戦士めいた言動が、嘘のようだ。

「……そんなだから、貴女はいつまで経っても独身なんですよ」

「待ってくれジョージ。それとこれとは関係が」

「無いと言えますか？『立てば戦争、座れば革命、歩く姿は傍若無人』の貴女と夫婦になりたいという男性が何人いました？親同士が決めたお見合いなどを抜きにしてください」

『独身』という単語に、ジョージの同行者である鎧の人物が一瞬反応する。

「……………いません」

絞り出すように、小さく発せられた弱々しい言葉。それを聞き、ジョージは呆れたようにため息を吐く。



「今回の件で、上層部から何らかの罰を受けることになるでしょう。それに懲りたら、もう少し自重してください。具体的に言うのと、戦いではなく男性との出会いに飢えるとか。そのために淑やかさを身に着けようと努力するとか」

「わかりました……」

クリステイーナがジョージの言葉に、深々と頭を下げる。

これがペンは剣よりも強し、か。周囲にいた者たちは、目の前の光景をそう表現した。「じゃあ、あとはジュンさんとサレンさんに任せます」

「任されたよ」

「ごめんなさいね。こんな夜中に駆り出して」

ジョージは仮面を装着し、フードを目深に被って帰り支度を進める。

「いえいえ。姉が何かやつたとあれば、弟である俺も無関係ではありませんから。それに、これも【ニャルラトホテツプ教団】の仕事の一環ですよ」

少女達に背を向け、ジョージは扉に向かう。外から様子を窺っていた騎士達は、彼に道を譲るように下がる。

「暗黒のフアラオ万歳。ニャルラトホテツプ万歳。くとうるふ・ふたぐん。にやるらとほてつぷ・つがー。しゃめつしゆ。しゃめつしゆ。にやるらとほてつぷ・つがー。くとうるふ・ふたぐん。それでは皆様、ごきげんよう」

ジョージは謎の言葉——自らが崇める神を称える言葉を唱えると一礼し、【自警団】のギルドハウスを去って行った。

翌朝。王城。

「さて、皆も知っているかもしれないけれど、昨日クリスちゃんと数名の騎士が【自警団】に攻め込んで、人間と獣人族の戦争が起きるところだったのを、私とジョージ君とサレんちゃんですめてきましたよ。そして今回の件を上層部に報告した所、同行した騎士はサレんちゃんの孤児院で2週間のボランティア活動。クリスちゃんは今日から一か月の自宅謹慎を命じられたよ。何か質問はあるかな？」

騎士達の前で先日の件と、下された処分について全身鎧に身を包んだ女性、<sup>NIGHTMARE</sup>【王宮騎士団】団長ジュンが報告する。報告を終え少しすると、騎士の1人が手を挙げ  
る。

「はい。【自警団】側の被害は？」

「2名が軽い怪我を負って、ギルドハウスに少し損壊がでたよ。賠償金のほうは、後日改めて交渉して決めることになっている」

「わかりました。自分からは以上です」

「他には？……無いようだね。そういうわけで暫く人数が減るから、その分は私達で、無理のない範囲で頑張ろう」

『はっ！』

アストライア大陸の何処かの洞窟の奥深く。

「えー、まずは皆さま、急な呼び出しにに応じてくださり、ありがとうございます。全員揃ったようですので、これより緊急会議を行います」

広い部屋を中心に設置された円卓のうちの1つに座っていた俺は立ち上がり、会議の開始を告げる。

円卓を囲んでいるのは俺を含めて9人。

俺から見て時計回りに席についているのは、『迷宮女王』クイーンラビリスことラビリスタ。本名、模索路晶。『変貌大妃』メタモルレグナントことネネカ。本名、現士実似々花。『跳躍王』キングリープことラジラジ。本名、ラジクマール・ラジニカーント。彼ら彼女らはこの世界『レジェンド・オブ・アストルム』を開発した国際組織「ウイズダム」の7人いるトップ、『七冠』セブンクラウンズのメンバーだ。俺の従姉、『誓約女君』レジーナゲッシユことクリステイーナ・モーガンもその1人。

続いてノウエム。本名、園上矛依未。そのうえむいみここにいる『七冠』セブンクラウンズの皆さんと、俺や、俺が

ギルドマスターを務める「ニヤルラトホテツプ教団」のメンバーのように、この世界がゲームの世界であると認識している数少ない人物。

最後にギルド「ニヤルラトホテツプ教団」のメンバー。こいつらとは小学校からの腐れ縁だ。本名については割愛する。

「それで？ 私達を呼び出すということとは、よほどの事態なのでしょうね？」

ティーカップを傾け、俺にそう訊ねるネネカさん。他のメンバーも、何事だと目で訴える。

「昨夜、俺の従姉であるクリステイナ・モーガンが「自警団」のギルドハウスで少々暴れまして。その鎮圧のために、俺は「自警団」のギルドハウスに行っただけです。まあ、従姉が暴れたことについてはジユンさん、俺が前にいたギルドのマスターに任せただけなんです……その場にすごい人がいたんです」

「誰かな？」

「晶さん。あなたの『プリンセスナイト』の少年です」

「んぐっ!？」

晶さんが盛大に咽た。

そして呼吸を整え、俺に詰め寄る。

「そ、それで!?!彼に怪我はなかった!?!」

「傷一つついていませんから、安心してください」

見たまま、ありのままの事実を伝えると、晶さんはホッと胸を撫でおろし、席に戻る。「続けます。それで、姉が迷惑をかけたので関係各所に頭を下げようと彼の周辺の人物について少し調べていたら、ちよつと気になる人がいたんです」

「気になる人？」

「お腹ペコペコの『ペコリーヌ』。どう考えても偽名臭いので顔を見たら、血の気が失せましたね。腰が抜けるかと思いましたがよ、ええ」

「名前の由来になるほどの食欲にか？」

クッキーを頬張りながら、ノウエムが茶化してくる。

「俺の記憶が正しければ、彼女の本名はユースティアナ・フォン・アストライア。王都で支配者を気取る『カイザインサイト覇瞳皇帝』と違う、本当のユースティアナです」

瞬間、場の空気が凍り付いた。

ユースティアナ・フォン・アストライアは、この世界に2名存在する。

1人目は俺が今言った少女。彼女は本物で、この世界『セフンクラウンズレジェンド・オブ・アストルム』の出資者であるアストライア王家の娘。

2人目は偽名で、ランドソルにある王城で支配者として君臨している『セフンクラウンズ七冠』の1人、『カイザインサイト覇瞳皇帝』。性別は男性の日本人だが、こちらでは女性のアバターを使用している、

所謂ネカマというやつだ。そしてネネカさん達曰く、奴が今回の騒動の黒幕だそうだ。「見間違いの可能性は？」

見間違いであつて欲しいという願望を込めて、ラジラジさんが俺の顔を見る。

「無いですね。あの顔立ちに髪と瞳の色は、間違ひなくユースティアナ・フォン・アストライアその人でした」

『……』

そして、この場にいる全員が口を閉ざす。

「アストライア王家の娘で。彼女の実家はこの世界、『レジェンド・オブ・アストルム』の出資者。ただでさえ当時ログインしていたプレイヤーが閉じ込められていて騒ぎになつているのに、その中に出資者の娘までいたとなると世間は大騒ぎでしょうね。『レジェンド・オブ・アストルム』もそうですけど、『ウィズダム』のトップである『七冠』セブンクラウンズの立場も危ういんじゃないんですか？」

『……』

ここでSANチェック。俺以外の面々が無言になり、頭の中でダイスを振るう。結果は――。

「……」

椅子から仰向けに倒れたと思いきやブリッジの体勢をとり、蜘蛛を思わせる挙動で部

屋中を動き回る晶さん。

「びっくりするほどユートピア！びっくりするほどユートピア！」

椅子を部屋の隅に持って行き、パンツ一丁になって自分の尻を叩き、奇声を上げながら椅子に乗り降りを繰り返すラジラジさん。

「はむはむはむ……」

紅茶にこれでもかと砂糖を投入し、もはや『紅茶風味の砂糖』と化した物体をスプーンで口に運ぶネネカさん。

「も(い)も(い)も(い)……」

クツキーを口いっぱい頬張り、まるでハムスターのようになったノウエムは、ハイライトの消えた目で遠くを見つめながらクツキーを咀嚼する。

そして、俺のギルドメンバーは……。

『……』

テクスチャが盛大なバグを引き起こし、昔流行ったらしい『頭の悪い人』に変貌していた。

「……落ち着きましたか？」

『はい』

待つこと数分。タイミング悪く晶さんの顔面をラジラジさんが踏みつけて2人とも

正気に戻り、ネネカさんとノウエムも続いて平静を取り戻し、他のメンバーのテクスチャも元に戻った。

「さて、今の話を踏まえたうえでの今後の活動ですが。大きな変更点はありません。対カイヤラインサイト『覇瞳皇帝』に備えて戦力を集める。向こうに目を付けられないように慎重に、しかし出来るだけ急いでやりましょう。現実で頑張って事態の收拾に当たっている残りのセブンクラウンズ『七冠』への負担と、閉じ込められたプレイヤーの肉體、親戚ご友人、その他諸々のためにも」

『了解』

俺の言葉で会議を締めると、全員が席を立ち、行動を開始する。

全ては向こうで心配している俺の家族と大学の先生方、出席できていないせいで単位の取得が危うい講義と、冷蔵庫で腐敗しているかもしれない食材と、滞納している光熱費のため。

そのついでに、向こうで他プレイヤーを心配している人々のために。

どんな理由があろうと、俺は『覇瞳皇帝』を絶対に許さない。



## かくして彼らは集う

この世界はおかしい。

何がおかしいかと言われれば、何もかもがおかしい。

ランドソルの路地裏、顎に手を当てて俺は頭を回転させていた。

ゲームのテンプレ的な街並み。存在するはずのない、獣耳の生えた獣人族<sup>ビースト</sup>や、耳が長いエルフ族。そして角と翼の生えた魔族。

俺がいまいる場所は、『アストライア大陸』にあるという王都『ランドソル』。

「俺の記憶が確かなら、ランドソルというのはゲーム『レジェンド・オブ・アストルム』に登場する地名のはず……」

加えて、王都の中心にある王城の玉座に君臨している王の名はユースティアナ・フォン・アストライア。その名前の人物は何度かニュースで見たことがある、あるんだが……。

「(外見と名前が一致しない。どうなっているんだ？あの時、『ソルの塔』で大爆発みたいなものがあったと思ったら光に包まれて……)」

とにかく情報が足りない。『ソルの塔』でなぜ大爆発が起きたのか、嘗てのギルドメン

バーはどこに行つたのか、どうしたらログアウトできるのか。

考え事をしながら歩いていて俺は、鎧の擦れる音から人が歩いてきたことに気づき、横に少しどける。

「今の人は……」

横切つたのは、鎧を着た青年と帽子に宝石を飾り付けた小柄な女性。青年のほうに見える覚えはないが、女性のほうは見覚えがある。

「失礼、そちらのお姉さん。もしや貴女は、ネネカさんではありませんか？」セブンクラウンズ  
1人、『変貌大妃』の」

俺の言葉が耳に届いたのか、2人は振り返る。青年のほうは警戒しているのか女性を守るように立ち、いつでも剣を抜けるように柄を握る。まあ、初対面だからしょうがないか。

「下がちなさい、マサキ」

「ネネカ様？」

女性——ネネカさんはそうやって俺の前に来ると、俺の顔をまじまじと見つめる。

「貴方、今私のことをなんと叫びましたか？」

『変貌大妃』メタモルレグナント

「いいえ、それよりも更に前です。……わかりやすく言いましょう。貴方は私のことを

最初、何と言いましたか？」

最初、最初というところ——あ。

「『お姉さん』と呼んではずです」

「お姉さん……」

言葉を反芻するように、ネネカさんはつぶやいたあと、小さくガッツポーズをした。

「いかにも。私こそは『七冠』の一人、『変貌大妃』ことネネカです。そういう貴方は、クリスの従弟のジョージですね？ お久しぶりです」

ネネカさんは腰に手を当ててふんぞり返るように胸を張り、鼻から思いっきり息を吐き出して渾身のドヤ顔で簡単な自己紹介をした。

彼女の本名は現士実似々花。俺の従姉、クリステイナ・モーガンが名を連ねる

『七冠』の一人。見た目は小柄だが、俺よりも4つ年上の『お姉さん』だ。初対面の時、年下扱いして怒られたのは今でも覚えている。

「ネネカさん、何がどうなっているんですか？ ゲームからログアウトできないし、街の人達もこつちが現実であるように振舞っているんですけれど」

「原因について大凡の予想はついていますが、対処法については調査中です」

「その話、私も混ぜてもらえないかな？」

突然、この場に響いた別の女性の声。

声のした方を振り向くと、そこに立っていたのは……

「晶さん？」

「晶……」

「やっ。久しぶり」

気さくに挨拶をしてきた赤毛の女性の名は模索路晶さん。彼女もまた『七冠』の1人であり、『迷宮女王』と呼ばれている。

「どうしてここに？」

「見覚えのある人影を見てね、タイミングを見計らって話しかけようと思つて尾行していたんだよ。……ああつと、謝るからそう睨まないでよ。ネネカ」

ちらりと見れば、ネネカさんが眉間に皺を寄せて晶さんを睨んでいた。

「さて、単刀直入に言おう。……私と手を組まないかい？」

晶さん曰く、ゲーム世界から脱出する方法を見つけるため、1人でも多くの人員が欲しいらしい。最低でも、この世界に違和感を感じている人であることが条件だとか。晶さんは現時点で他に2名、この世界に違和感を抱いている人物と接触し、その人達とギルドを組んでいるらしい。

「出来ることならそうしたいんですけど、今の俺は【NIGHTMARE王宮騎士団】の団員ですから。手を組むとなると、ギルドを抜けないといけないので、それからでなければ」

「問題ないよ。……ネネカは？」

「引き受けましょう。但し、ギルドに所属すると少々面倒なことになりますので、自由に動いても構わないのであれば」

「味方になってくれるなら、構わないよ」

ネネカさんは手袋を外し、晶さんと固い握手を交わした。

「そういえばジョージ君、クリスの様子は？彼女はこの世界をどう認識している？」

「おそらくですけど、こっちが現実だという認識でエンジョイしていますね」

「そっかー……彼女の協力も得られたら良かったんだけどなあ」

無理なものはない。晶さんがそう妥協したところで、この日は解散となった。

それから数か月経ったある日の夜。

ランドソル郊外にある、廃教会への道中。

「本当に現れるのでしょうか？例の人影は」

【NIGHTMARE王宮騎士団】の一人、トモさんが不安そうな声で団長のジュンさんに訊ねる。

トモさんが言う例の人影とは、満月の夜に廃教会の墓地に現れて何か呟くと笛を吹

き、終わるといずこかへと去っていくという謎の人物のこと。

何か被害が出たわけではないけれど、夜の墓地から聞こえる笛の音色というのが謎の恐怖感を感じるため、俺達が調査に乗り出すことになったのだ。万が一遭遇した場合、住民が不安がっているからと口頭で注意するよう言われている。それでも続ける場合は、実力行使に出るらしい。

「現れる。その証拠にほら、今夜は満月だ」

「ああ、とても綺麗な満月だなあ。場所が夜の墓地でなければ、その人物が笛を吹く姿はさぞ映えるだろうに」

団長のジュンさんが言う通り、今夜は綺麗な満月が星と一緒に夜空を照らしていた。

団員見習いのマツリさんは不安なのか、団長にくつついて離れない。一方、俺の従姉のクリステイーナ・モーガンはピクニック気分で歩いている。

「着いたよ」

「っ!」

団長の言葉を聞き、マツリさんの肩がピクツと跳ねる。

誰も近寄らない廃教会の墓地ということもあつてか、墓石はどれも風化が進んでいる。苔まみれのものから、ボロボロに風化してしまっているものと様々だ。

人の気配は——うん、ある。人数からして3人程度だろうか。

薄暗いため、分かるのは人影の輪郭ぐらい。

「姉上、先程夜の墓地でなければ笛を吹く姿は映えると言いましたね？」

「ああ。それがどうした？」

「夜の墓地だからこそ、映えるものも世の中にはあるんですよ」

そう言つて俺は黒のコートを羽織り、懐から取り出した仮面を被る。

「ジョージ？ 一体何を……いや、まさかお前が!？」

何かに気づいた従姉の言葉を無視し、俺は墓地の中心に向かった。ちようど、月明かりがスポットライトのように俺を照らしてくれている。いいぞ、我ながらナイスタイミングだ。

「暗黒のファラオ万歳。ニャルラトホテツ万歳。くとうるふ・ふたぐん。にやるらとほてつぷ・つがー。しゃめつしゆ。しゃめつしゆ。にやるらとほてつぷ・つがー。くとうるふ・ふたぐん」

そして墓地の中心に移動し、笛を吹いた。

「♪〜」

』

同時に聞こえる、歌声。歌声の主は3人。物影から姿を現し、俺の下に近づいて来る。

「……ふう。やあ、同志諸君。よくぞ集まってくれた」

演奏を終えた俺は、近くにきた同志に声をかける。

「まったく、もう少し普通に呼べないのか？」

「すまない。少し劇的な再会を演出してみたいと思ってね、ついやってしまった。後悔はしていないが、反省はしている」

「だったら最初からするな」

仲間と少し言葉を交わした俺は、ジユンさん達の方を向いて頭を下げる。

「……とまあ、この通り、夜な夜な墓場で笛を吹いていた男というのは俺です」

「なぜこんなことをしたんだい？」

「いやあ、俺だって手紙を書くなりして呼びたかったんですよ？でも住所が分からないんじゃない、書いても意味がありませんから」

「……」

至極当然な（俺はそう思っている）答えに、ジユンさんが口を噤む。

「さて、姉上。俺が今年の初めに立てた『誓約』<sup>ゲツシユ</sup>の内容を、覚えていますか？」

「覚えているとも。『今年中に自分だけのギルドを結成する』だったな」

「ええ。そのギルドのメンバーは……ここにいる3名です」

打ち合わせをしていないにも関わらず、3人が横一列に並んだ。俺は彼らの姿が見えるようにどき、芝居がかったように頭を下げて3人に手を向ける。



ギルドの結成要件は、マスター込みで3人以上。それぞれ年齢が10歳以上であること。そして、何らかの社会貢献を含む活動目的を明確にすること。この時点で、要件の2つはクリアしている。

「というわけでジュンさん。俺の業務の引継ぎ、つて言つても引き継ぐほどの業務なんて大して無いですけど、終わり次第俺は「NIGHTMARE王宮騎士団」を脱退します」

「……すまない。私の一存で、すぐに結果は出せない。明日、改めて話し合うということ  
でいいかい？」

遠回しに駄目と言われたような気がする。実際、本人もそのつもりで言ったのかも  
れない。

「わかりました。では、また明日改めて。同志諸君。結果報告のために手紙を寄こすか  
ら、今の所属ギルドを教えてくださいませんか？」

一ヶ月後。

「さて、手紙によるとこの辺りのはずなんだけど……」

長期間の話し合いの結果、俺のギルド移籍は認められることになった。そして【ギル  
ド協会】での申請が受理され、拠点もいただいた。

そして現在俺達は、クエストに行く途中の寄り道で、ネネカさんに指定された場所に向かっていった。

「なあ、本当にこの道で合ってるんのか？」

「いや合ってるよ。合ってるはずなんだけど……」

俺達が入った洞窟。指定されたルートを通った先にあつたのは、まさかの行き止まり。

「遅かったですね」

突如、壁から声が聞こえた。そして壁が一瞬揺らめいたと思うと消えていき――。

「ネネカさん!? 今のは一体……」

「これこそが私の権能『ミラーミラー』。能力は『分身』と『変身』。ついて来てください、案内します」

どつかの漫画のような説明をしたネネカさんの背後には、大きな洞穴が。なるほど、壁に『変身』していたのか。これはまた便利な能力だ。

「なあジョージ、ネネカさんって、もしかして『変貌大妃』メタモルレグナントこと現士うっしみねねか実似々花かのことか？

『七冠』の』

「そうだよ」

『おおう』

有名人に会って興奮しているのか、仲間達がざわめいている。

「晶。ジョージがギルドメンバーを連れてきましたよ」

「ありがとう、ネネカ。じゃあ、始めようか。皆、席に着いて」

案内された先に広がっていたのは、それなりの広さの空間。真ん中には円卓と、人数分の椅子。

「やべえよやべえよ。『迷宮女王』<sup>クイーンラビンス</sup>もいるじゃねえか」

「まじか。まじだわ」

「こんな状況で言うのもあれだけど、『レジェンド・オブ・アストルム』やってて良かったあー」

などと好き勝手に言いながら、近くの席に仲間達が腰かけていく。

仲間達の反応からわかるように、あいつらもここがゲームの世界だと認識している。

きっかけは何かと言えば、俺が吹いた笛。あれは俺がよく口ずさんでいた歌のメロディーで、こいつらはそれをよく聞いていた。まだゲームとして『レジェンド・オブ・アストルム』を楽しんでいた頃も、ギルドの歌と称して偶に合唱なんかもしていた。そのリズムを覚えていたのか、噂を聞いて墓地に駆けつけ、俺の服装を見てある程度思い出したらしい。

「さて、状況を整理するよ」

。そう言った晶さんが、今回の議長を務める流れになった。そして開示された情報は――

・ソルの塔で謎の大爆発が起こった時にログインしていたプレイヤーはログアウトできなくなった

・そしてプレイヤー達は、この世界を現実と認識して生活を送っている

・最近発生している、突然人物や記憶が消滅する「ロスト」と呼ばれる現象

・「シャドウ」と呼ばれる。人に化け、人語を発する謎の魔物

・ヒューマンの国であるランドソルの玉座に君臨する獣人族のユースティアナ

「……といったところかな。じゃあ、まずはネネカ。君が知っている情報を可能な限り

開示してもらえるかい？」

「わかりました。まず玉座に君臨しているユースティアナですが、あれは偽物です。本

名は千里真那。私達と同じ『七冠』のセブンクラウンズ一員で、『カイザーインサイト覇瞳皇帝』と呼ばれています。皆さん

もニュースなどで姿を見たことがあるはずですよ」

そうか、やっぱりあれは偽物か。『カイザーインサイト覇瞳皇帝』は男だったはずだけど……あれか、所謂

『ネカマ』というやつか。

「ソルの塔での大爆発ですが。あれは、晶のプリンセスナイトの少年とその仲間達が

『カイザーインサイト覇瞳皇帝』と激闘を繰り広げたことよって起こったようです。それがなぜ今の様な

状況を生み出したのかは不明ですが……。『だいたい千里真那のせい』。簡単に纏めると、この一言で収まります」

「いやいや、それはちよつと雑過ぎるよ。実際そうなんだけどさ」

「現実世界の人達と、何とかしてコンタクトはとれないんですか？」

「無理だね。そもそもログアウトができないし。私も何回か試してみたけど、エラーばかりだったよ」

匙でも投げるように、晶さんは両手を力なく挙げる。

「次に対『カイザーインサイト覇瞳皇帝』だけど。これはかなり厳しいね。今ランドソルの人々は彼をユースティアナ陛下だと認識している。下手に動くと、国家権力で握りつぶされるのがオチだね」

「じゃあ、ランドソルの人々の認識を変えれば勝機はあるということですか？」

「どうだろう。本物を見つけておかないと、余計な混乱を招くことになりそうだ。それに、認識を改変した方法を見つけて、解除もしないとだし」

晶さんが言う通り、まずは本物のユースティアナを見つけないといけない。それも、この広大なアストラライア大陸の何処かから。

「本物のユースティアナの搜索は俺達がやります。大陸各地への布教活動と称して、昔の仲間も探すついでに」

「ありがとう。参考までに聞くけど、『ニヤルラトホテツブ教団』のギルドメンバーって、君達込みで何人くらいいたのかな？」

「えっと……108人。煩惱の数だけいましたね」

「そ、それは頼もしいね……」

思っていたよりも多かったのか、若干引き気味の晶さん。冷や汗もかいているように見える。

「では、私は認識改変の絡繰りの説明をしましょう」

「任せた。なら私は、戦力確保のために動くことにするよ」

これにて会議は終了。となる寸前で、晶さんが慌てたように待ったをかけた。

「ごめんごめん。一番重要なことを言い忘れるところだったよ」

「どうしました？」

「実はね、私のプリンセスナイトの少年なんだけど。彼もこっちに来る」

「こっちに来るって、まさか現実世界から？」

「いいや、彼はちよつと複雑な事情があつてね。それで、もし彼に遭遇して、危機的状况に置かれていたら、守ってあげて欲しいんだ」

晶さんは手を合わせ、深々と頭を下げる。

「言われなくても、守りますよ」

『善行を積み、神の依代に相応しい機械を作り出し、地上に神を降臨させる』  
「「それが、我ら【ニヤルラトホテツプ教団】の目的「三」

# ジョージ・モーガンという男

ある朝の、ランドソル王城門。

「おはようございます。あなたが【NIGHTMARE王宮騎士団】の団長、ジュンさんでしょうか？」

右腕に包帯、首元にマフラーを巻き付けて鎖をジャラジャラ鳴らしてやってきた魔族の少女。

彼女の名はアンネローゼ・フォン・シュテツヒパルム。本名はアンナ。自らを『疾風<sup>ヘカマーテ</sup>の冥姫』と名乗る、「トワイライトキヤラバン」というギルドのメンバーの一員。

「そうだけど……キミは？」

「あつ、自己紹介が遅れました。私、「トワイライトキヤラバン」のアンネローゼ・フォン・シュテツヒパルムと申します。実は、あなたにお訊ねしたいことがあつてきたんです」

時と場所を弁えたのか、普段の中二病な言動を控えて普通の挨拶をする。

「実は先日、私が前に所属していた【ニヤルラトホテツプ教団】の団長からギルド再結成の話を持ち掛けられました。……まあ、今のギルドになんやかんや愛着も湧いたので脱退はできなかつたんですが」



「【ニヤルラトホテツプ教団】の団長というと、ジョージ君のことかい？」

その通り。と、アンナは頷いた。

「それで、【NIGHTMARE王宮騎士団】にいた頃の団長のことがちよつと知りたいなと思つて来たんですけど……お時間よろしいでしょうか？」

アンナの申し出に、ジュンは暫し考える。

彼女の主な仕事は門番。

全身鎧を身に着けたまま微動だにしないこともあつて、観光客の記念撮影の被写体になることも珍しくない。

とは言つたものの、仕事中に誰かとおしゃべりに熱中するのはいかなものか。と、真面目な彼女はそう考えた。

「こう考えませんか？『自分が暇を持て余せるということとは、それだけ王都が平和なんだ』と」

アンナの言葉が、甘い誘惑となつてジュンの心を揺さぶる。

そして考えた後、彼女が出した結論は……。

「……まあ、ここで門番をしている間だけでよければ」

自分の知らないジョージの一面が分かるかもしれない。或いは、彼のギルド【ニヤルラトホテツプ教団】がどのような組織かわかるかもしれない。という理由から、彼女は

アンナと少し話すことにした。

といつても、2人が語るジョージの様子にそこまで差異はなかった。

年齢問わず、女性は『さん』など敬称をつけて呼ぶ、温厚な男性。しかし温厚さの裏返しなのか、時として冷酷な一面も見せる。

戦闘では弓や槍などの長物を使った中々遠距離戦を好むが、近距離戦も熟す万能型。村をモンスターから守るために大人たちから戦い方を教わり、実践してきたこともあつてそれなりの実力がある。

「そういえば、『前に所属していた』といったけれど、君はなぜ「ニャルラトホテツ教団」を抜けたのかな？」

「あー……団長つて思考が脳筋気味というか、基本的に作戦の内容が『相手が死ぬまで殴る』なんですよ。心当たりはありますか？」

「沢山ある」

「それが影響したのか、他の団員も種族性別関係なく筋肉質な体型でして……簡単に言うとうと、筋肉だらけのむさくるしさに耐えきれなくて脱退しました」

「そ、そうなんだ……てつきり、教団の教義に疑問や不満を抱いて脱退したものだ」と

「いえ、教義は確かにありますけど、結構緩いですよ？ 飲食に関する制限は無いですし、婚姻も愛があり犯罪でなければよしとしますから」

「ふむ。【ニヤルラトホテツプ教団】が信奉する神は、どのような神なのかな？ こう、外見とか」

「教団の本部に石像がありましたけど、とても奇妙な造形でしたね。貌は目と鼻と耳のないのつべらぼう。手足は細いものや太いもの、潤いに満ちた瑞々しい肌や干した果実のように皺だらけの肌が混在。胴体も男性と女性の特徴が混ざり合った雌雄同体の造形になってました。何でも、様々な姿で顕現するため、決まった容姿がないことを表現しているとか」

ちよつと見てみたい。そんな好奇心が、ジユンの心に生まれた。

「じゃあ、次は——」

「団長！ 団長！」

次の話題を振ろうとしたところで、【NIGHTMARE王宮騎士団】の団員が大急ぎで門まで駆けつけた。

「どうした？」

「ワイルドグリフオンの変異種と思われる大型の魔物が王都北門を破り、王都内に侵入したとの報告がありました！」

「わかった。すぐに向かう！ すまないが、話の続きはまたの機会にさせてくれないか」

「ええ。お気をつけて」

「ありがとう」

アンナは道を開けるように横に退くと、その隣をジユンが駆け出し、現場へと急行した。

ジユンの姿が見えなくなつたところで、アンナは数歩門を離れて王宮を見上げる。

「（偽りの王を玉座から引きずり下ろす、か……。まるで小説みたいだ）」

ニヤリ。と、心の中で口角を上げて笑みを浮かべるアンナ。

彼女はジョージほどではないが、この世界に関するすべてが作り物であると自覚している。そして、自分達が夜な夜な見る夢こそ、現実であると。

今のギルドに愛着があるからと断つたのは事実。しかし、同時に彼とこのような契約を交わしていた。

『こちらの準備が整い、時が来たら招集をかけるから、それに応じる事』

現在、「ニヤルラトホテツプ教団」の構成員としてギルドに登録されているのは団長を含めて4名。

大人数で動けば敵の注目を集めるため、今は少ない人数で行動する。

それに加え、他ギルドの協力者も戦力として加わっていると聞いている。それも現時

点で、<sup>セブンクラウンズ</sup>七冠が3名いると聞いた。

そこに【ニヤルラトホテツプ教団】の構成員108名が加われば、負ける気はしない。……しかし、油断大敵という言葉が世の中には存在する。

「帰ったら、筋トレでもしよう」

来るべき時への備えの第一歩に肉体の鍛錬を選んだアンナは、王宮に背を向けて街の人混みへと姿を消していった。

一方その頃。アストライア大陸の何処かにある拠点。

「なあジョージ。去年合コンでお持ち帰りした女子との仲はどうなったんだ？」

「んぐっ!？」

ワイルドホーンのもも肉を使用したカレーを食べていると、そんな爆弾発言が投下された。

水を飲んでいたタイミングだったため、思わず咽た。

「詳しく」

ネネカさんは相変わらず何を考えているか読めない表情をしているが、帽子の宝石が輝き方からワクワクしているのがわかる。

「ネネカさん。最初に言っておきますけどお持ち帰りしたというのは誤解です、あれは——」

「わかっています。ですが言い訳に時間を割いて話が長引くと、後日誇張表現山盛りで晶とクリスに伝えますよ」

「おい馬鹿やめろください」

「いかん、焦りで日本語がおかしなことになっている。」

心を落ち着かせるために周りを見てみると、ムイミが俺の顔を覗き込むように近づき、興味が無いように飯を食っているが俺をチラチラと見るマサキさんとラジラジさん。仲間たちは白状してしまえと満面の笑みで煽っている。畜生、味方が一人としていない。

晶さんは目を輝かせて根掘り葉掘り訊いてくる程度で済みそうだけど、ブラコン拗らせたクリステイーナが知ったら面倒なことになる。

「まあ、人数合わせで呼ばれた合コンが終わって帰ろうとした時に、同じく人数合わせで呼ばれた人がいたんです。それで途中まで送りますってことで同行していったら偶々同じアパートの、隣の部屋に住んでいたんです」

「ほほう」

「で、帰り道で話を聞いたら彼女も俺と同じゲームやアニメのファンだったので、『ここ

で会ったのも何かの縁』ということでもメールアドレスと電話番号をお互いに教えて交流が始まったんです」

「なるほど……」

ふむ。と、頷いたネネカさんに、更に続けて話す。

「それ以来面白い物の荷物持ちを頼まれたり、アニメのイベントなんかと一緒に رفتりする程度の仲まで進展しました」

「随分親密になったんですね」

ニヤニヤといやらしい笑みをネネカさんが浮かべる。

「あれは確か、俺が誕生日を迎えたんで4月の中旬頃ですかね。堂々と酒を飲める年になったから、酒の味のレビューをしてくれないか頼まれたんです。8か月後に自分が誕生日を迎えて、どっかのタイミングで酒を飲むときの参考のために。それで俺の部屋で酒を、とりあえずコンビニで買ってきたビールとチューハイを俺は飲んで味とかの感想を口にしたんです。『場酔い』って言うんですかね。そしてら彼女、飲んだわけじゃないのに酔ったような感じになって『帰りたくない』とか『寝る』とか言って寝落ちしてしまいました……」

「マサキ」

「はっ」

その一言で察したのか、マサキさんが香辛料の入った壺とスプーンをネネカさんに手渡す。

「……その後は、どうなりましたか？」

「普通に彼女をベッドに寝かせて、俺は痛いのを我慢して床で寝ましたよ」

「……ノーギルテイ」

ネネカさんはそう言うとう壺とスプーンをマサキさんに返した。

何だか知らないが、許されたようだ。やったぜ。

「(そういえば)」

食後のコーヒーを飲みながら、俺は今話題に上がった彼女のことを考えた。

彼女は今どこで何をしているのか。

『「こちらの世界」に来ているのか。』

来ていたとして、記憶を失っているのか、それとも記憶を保持しているのか。来ていないのであれば、どのような精神状態なのか。



物静かで、あまり人との交流が得意とは言えない彼女が、少し心配になった。

「(元気にしてるかなー……蘭さん)」

## 金属製の悪夢（前編）

某日、ランドソル王城内部。玉座の間。

「——報告は以上です」

「……そう。引き続き、ユースティアナとラビリスタのプリンセスナイトの少年の監視を続けて頂戴」

「はっ」

猫耳の生えた獣人族ビーストの少女が、狐耳の妖艶な雰囲気を放つ美女『カイザレインサイト覇瞳皇帝』への定期報告を終え、部屋を去る。

さて、どのタイミングで声をかけるか……。

「早急に姿を現しなさい。さもなければ、【NIGHTMARE王宮騎士団】を呼ぶわよ」

じろり。と、『カイザレインサイト覇瞳皇帝』が俺のいるほうを睨みつける。どうやら、俺が姿を隠していたことはバレていたらしい。

「……これでいいか？」

「貴方、クリステイーナの従弟のジョージね。何か私に用かしら？」

さっさと話せと急かすように、『カイザレインサイト覇瞳皇帝』が眉間に皺を寄せる。

「じゃあ、単刀直入に言おう。あんたも手を焼く強敵を倒すために、俺達と手を組まないか？」

俺の用件を聞いた『カイザインサイト覇瞳皇帝』が、固まる。

あれは1週間前のこと。

クエストが無いか確かめるためにギルドに行った時、同行していたノウエムがある女子を親でも殺されたような凄まじい怒りの籠った目で睨んでいた。そしてその殺気をを感じ取ったのか、相手の女子はそそくさとギルドを出てしまった。

幸い、その時ノウエムは俺達と同じように仮面を被っていたため相手に顔は見られない。とはいえ、仲間の1人が何事かと腰の剣を抜こうとしていたので、俺はノウエムを連れてギルドの裏手に移動して問いただした。彼女と何があったのかと。

ノウエム曰く、あの少女こそが世界が滅茶苦茶になった元凶だと。ジョージ達と行動していたから抑えようとしたけど、どうしても我慢できなかつたらしく怒りの籠った目で睨んでしまったらしい。

それから3日ほど経ったある日、ノウエムから追加の情報があつた。ノウエムの言う元凶と彼女の目鼻立ちは同じだが、髪の色と長さがまるつきり違う。似ているだけで別人だつた、と。

どうやらこの世界が滅茶苦茶になった原因は『カイザインサイト覇瞳皇帝』の他にもう1つあるらしい。

そしてそれは、『カイザーインサイト覇瞳皇帝』を打倒してしまうほどの力を持った強大な存在。

『正気ですか!?! ジョージ』

『カイザーインサイト覇瞳皇帝』に共闘を持ち掛けることを言ったら、ラジラジさんに正気を疑われた。

『脈は……正常。熱……問題なし。ちよつと口開けてー』

晶さんはどこからか医療器具を取り出し、俺の心身に異常が無いか確かめた。

『やめておきなさい、ジョージ。彼の説得に時間を割いている暇があつたら、戦力増強の為に時間を使いなさい。失敗に終わるのは火を見るよりも明らかです。おやめなさい』  
 ネネカさんは俺を無理矢理椅子に座らせると、それはもう必死にやめておけと念を押してきた。

でも俺は来た。戦うタイミングが前後するだけで、打倒『カイザーインサイト覇瞳皇帝』は変わらない。それこそ、終わって気が緩んだ一瞬を逃さず、後ろからアゾればいい。そう言つて、ラジラジさん達も渋々ながら頷いた。

『……つまり、アレを倒すために共闘したい。ということ?』

『そうだ』

『カイザーインサイト覇瞳皇帝』は一呼吸置くと、冷たい目で俺のことを見下ろすように。

「ノーよ。一介の学生如きが、この私と対等な立場になろうなんて烏滸がましいわ」  
 ぱつぱつと拒否した。

「それでもアレを倒すために私の力と情報が必要だと言うのなら、今ここで跪き、私に忠誠を誓いなさい」

「断る」

どうしても自分が上の立場でなければ気が済まないようだから、この話はさつさと諦めた方が良さそうだ。

「なら、今すぐここを立ち去りなさい。ここは貴方のような人間が足を踏み入れている場所じゃないのよ」

「言われなくても」

俺はワープクリスタルを使い、拠点へと帰還した。

【ニヤルラトホテツプ教団】ギルドハウス。

「ただいま」

「おお、ちょうどいい所に。ジョージにお客さんが来てるぞ」

「俺に？」

「いったい誰が何の用で来たんだろう。まさか、この間の件でノウエムがここにいることがバレたか？」

「お待たせしました」

「久しぶりだね、ジョージ君」

応接室のソファに腰かけ、紅茶を飲んで待つていたのは黒いジャケットを羽織り、面で顔を隠した女性。いや待て、この声は――。

「もしかして、ジュンさんですか？」

「うん。そういえば、兜を外した状態で話すのは初めてだったね」

照れくさそうに、ジュンさんが頬を掻く。

「それで、どうしたんですか？」

「うん。……最近、漆黒の鎧を纏った騎士が夜な夜な街を徘徊し、暴れている。という噂を耳にしたことはあるかい？」

ギルドの掲示板にもその人影の目撃情報を求める貼り紙が貼られていたので覚えて  
いる。

「ええ」

「実はその騎士の纏っている鎧なんだけど……どういうわけか、私が愛用している鎧と  
まったく同じデザインだったんだよ」

なるほど、それでいつもの鎧ではなく私服を着ているのも合点がいった。

「私も独自で調査を進めたいんだけど、その間の拠点になる場所を今は探しているんだ。」

NIGHTMARE

【王宮騎士団】は言わずもがな、噂のせいで実家には居づらいし」

「【サレンディア救護院】は？」

「行っただけけれど、タイミングが悪いことにサレンちゃんは商談のために外出中でね。他に頼れる場所がココぐらいしかなかったんだ」

だから頼む。と、ジュンさんが頭を下げる。

……ここまでされて断ったら後が怖い。

「わかりました。ただ、仮面を外して素顔を見せてください。一応、ジュンさんからの依頼という形ですのぞ」

俺は顔と名前と素性を明かさないう人間からの依頼は決して受けない主義だ。ギルド経由のクエストも、依頼人がどの誰かきっちり確認している。ミステリーで素性の分からない人物から依頼を受けるといのはわりとあるけれど、俺ならどんなに大金を積まれようと絶対に断る。だって、そういうのって胡散臭くて信用できないし。

そう説明するとジュンさんも納得したのか、仮面を外して素顔を晒す。

「……もういいかい？」

他人に素顔を見せることに慣れていないためか、少し恥ずかしそうに頬を赤らめている。

「ええ」

俺が瞬きする間に、ジュンさんは素早く仮面を被り直した。

「寝泊まりはどうしますか？ 離れに俺の部屋がありますけど、そこでしますか？」

「離れ……ああ、あの小屋だね。その場合、ジョージ君はどこで寝るんだい？」

「野宿用の寝袋で適当に寝ます」

「いいのかい？ 私に気を遣わなくてもいいんだよ？」

「いえいえ。元とはいえ上司であるジュンさんが寝袋使つて寝泊まりさせると、姉上に怒られそうですし」

「……わかった」

ジュンさんも納得したのか、頷く。

「それで、これからどうしますか？ 例の騎士の目撃情報の多くが夜間だから、俺達はクエストを探しにギルドに行きますけど」

「なら、私も同行しよう。宿代の代わりと、例の騎士が私ではないことを証明するため、暫く君達と行動を共にするよ」

「わかりました」

あれから3日が経過した。



夜。俺とジュンさんは直近で目撃情報があったという獣人族ビーストの居住区画を中心に、例の騎士を探していた。

装備は打突部分が剣のように長いメイス。遠距離攻撃用に、クロスボウと鉄球も装備している。相手がジュンさんのように鎧を纏っているなら、これが一番効果的だろう。

「……見つからないな」

しかし、今の所発見に至っていない。俺達が見たものと言ったら、道端で横になっている酔っ払いか野良猫、俺達と同じように搜索をしている他ギルドの構成員くらい。

「奴め、一体どこに……」

辺りを見渡ししながら呟きジュンさんだが、心の中ではそれはもうお怒りなんだろう。言動からひしひしと伝わっているし、眉間に皺が寄っているのが容易に想像できる。

何せ、自分と同じデザインデザインの鎧を纏った人物が、夜な夜な暴れまわって人々に迷惑をかけているんだからな。

「グオオオオーツ!!」

「主さまー!」

進行方向から見て東の方から、唸り声のようなものと子供の声。そして遅れて、金属のぶつかりあう音が耳に届いた。

「今のは?!」

「行きましようー！」

声のした方角に進んでみれば、そこには鎧の下半身が佇み、上半身の部分は空中に浮遊していた。上半身部分と剣で鑢ぜり合いを繰り返していたのは、青いマントを羽織った少年で……って、晶さんのプリンセスナイトじゃねえか！

「(マズい！)」

そう判断したら先手必勝。少年の攻撃を利用して後退し、下半身部分と一体化して元の鎧の姿に戻った人影に殴りかかる。

「■■ーッ！」

猿叫を上げながらメイスを振り下ろすと、相手は剣で防ぐ。しかし俺の筋力が勝り、相手の剣を兜の前頭部にめり込ませる。さっきの動きからして、相手は魔物の類で確定。だから加減する必要は無い！

「は!？」

不意に股関節部分が大きく開き、腰から下がプロペラのように回転した。

人間にはできないであろう、人外ならではの攻撃を回避し、メイスを中段に構える。

相手はめり込んだ剣を兜から引き抜き、何事もなかったように構える。

「ジョージ君！」

「あの少年は？」

「同行していた女の子と一緒に、少し離れたところに避難してもらっているよ」

同行していた女の子……一瞬すれ違った、穂先が青い槍を装備した白髪の女の子か。

ジュンさんは腰の剣を抜き、俺と同じく武器を構える。

「ジュンさん。見ての通り、あれは魔物の類です」

「なら、かける慈悲は無い。ここで仕留めるぞ！」

「はい！」

「オオーツ！」

魔物が雄叫びを上げて突撃し、剣を振り下ろす。

「ハアツ！」

ジュンさんがそれを受け止め、俺は背後に回って攻撃しようとした。

「ジョージ君！」

敵は俺に蹴りを食らわせようと鎧を再び分離させ、蹴りを繰り出す。かかったな阿呆が！

「フンツ！フンツ！」

足を掴み、空いている手で逆手持ちにしたメイスを叩きつける。アイスピックで氷を割るように、何度も、何度も。

そして膝の関節部分を逆方向に強引に折り畳んで手を離すと、同じように反対の脚の

膝関節部分を逆方向に曲げる。片脚だけの状態でも、首を締める程度の攻撃はできるだろう。

脚を力技で折り畳められた鎧の下半身が、地面でバタバタと藻掻く。

「ジュンさん！」

「ああ！」

激しい鏝ぜり合いを繰り返していたジュンさんに声をかけると、鎧の上半身部分に向かって押し出される。

「そおい！」

大上段に構えたメイスを振り下ろし、鎧を地面に叩きつける。

「このっ！」

「そおい！」

「このっ！」

「そおい！」

相手が動かなくなるまで、俺とジュンさんは交互に休みなく、攻撃を撃ち込む。浮遊して逃げたり、反撃したりする暇を与えず。無心で攻撃を続ける。

……しかし。

「うわっ!?!」

「なんだ、これはっ!？」

突然、魔物の体から濃い緑色の煙が噴き出した。万が一毒があつたらマズいからと、俺とジュンさんは煙を吸わない様に息を止め、目を閉じてその場を離れる。

「体に異常は？」

「……大丈夫、みたいです。でも——」

煙が晴れると、そこには何もいなかった。俺とジュンさんでポコポコに叩いた鎧は、上半身部分だけでどうにか下半身を回収して逃げおおせたようだ。しぶとい奴め。

「取り敢えず今日は帰って寝ましょう。それで、明日は朝から調査ですね」  
「そうだね」

## 金属製の悪夢（後編）

「あゝ……」

ランドソル中央、噴水広場。

12歳の少女が出してはいけない声を出しながら、マツリちゃんはベンチに座って天を仰ぎ見ていた。

「大丈夫かい？マツリちゃん」

「ふあつ!?ト、トモ姉ちゃん!」

声をかけられて驚いたマツリちゃんが文字通り跳ね起きて背筋を伸ばした。別にそこまでしなくてもいいのに。やっぱり、ここ最近、夜遅くまで見回りをした影響で心身共に疲れているみたいだ。

「はい。その屋台でたい焼き買ってきたよ」

「ありがとうございます!」

目を輝かせたマツリちゃんはたい焼きを受け取ると、大きく口を開けてかぶりつく。

「……はあく、疲れた体に糖分が沁みるっす」

口の中に広がる甘味に、マツリちゃんの表情が綻ぶ。

対照的に、私の心は曇り空よりもどんよりしている。私の表情も暗くなっていたのか、心配そうな目つきでマツリちゃんが私の顔を覗き込む。

「……トモ姉ちゃん、どうしたつすか？」

「まだ信じられないんだ。誰よりもこの国を愛し、守ろうとしていた団長が……」

「ここ最近、ランドソルにある噂が流れている。」

曰く、鎧を纏った騎士が夜な夜なランドソル内を徘徊しては無差別に人々を襲い、恐怖と混乱をもたらしている。

その騎士の外見は……私が所属する【NIGHTMARER王宮騎士団】の団長である、ジュンさんと瓜二つ。体格、鎧と剣のデザインが全て同じ。

しかも昨夜、夜の街で若い男が発したと思われる大きな雄叫びと金属が激しくぶつかる音が響いたらしい。そして音がしたという場所には、戦いの影響か道に罅割れと人型の凹みが残されていた。

若い男の大きな雄叫びと聞いて、私達はピンときた。

おそらく雄叫びをあげたのは、ジョージさん。あの人は刀剣を使って近距離で戦う時、『猿叫』という雄叫びを発して攻撃を行う。

それにより繰り出される一撃は凄まじく、金属鎧をトルソーごと紙切れの如く頭から両断したという。それ以来、ジョージさんが刀剣を使って戦うのは魔物のみにするとい

う制限がかけられた。

もしかしたら、あの場で団長とジョージさんが戦ったのかもしれない。最悪、ジョージさんが団長を……。

「なんだなんだ、浮かない顔をして。お通夜でもしているのか？」

そんな私の隣に、誰かが座って話しかけた。

見れば、大きめの紙袋を持ったパンツスーツ姿の副団長、クリステイナ・モーガンが座っていた。

「クリステイナ」

「おばさん。こんな時に何処で何してたつすか？」

「大人には色々あるのさ、お嬢ちゃん」

マツリちゃんの言葉を軽く流し、紙袋の中からバーガーを取り出して包み紙を剥がし、かぶりつく。分厚いハンバーグに、同じくらい厚い輪切りのトマト。その他レタスなどの野菜やチーズを挟んだ大きなそれを、朝から食べている。しかも紙袋の膨らみ具合から、10個ほど入っているようだ。私の気分が少し沈んでいることもあってか、見ているだけでお腹いっぱいになりそうだ。

「……あくあ、つまらん。いつそ白昼堂々と暴れて欲しいな。団長との戦いは楽しそう  
だ」



「クリステイーナ！あなたは……っ！」

この状況でも普段と変わらず、戦いに飢えている彼女の言動に憤りを覚えた。自宅謹慎が終わって職場復帰してから、以前のような危険な言動も無くなり、少しは変わったと思ったのに……！

「本物ならな」

バーガーの3分の2を食べ切ったところで、副団長は続けた。

「お前達は団長の何を見てきた？ 実直を擬人化したような堅物の団長が、簡単に己の信念を曲げると思うか？」

「それは……」

クリステイーナの指摘に、私は口を閉ざす。マツリちゃんをちらりと見れば、副団長のことをまじまじと見ている。

「それに、昨夜の闘争の跡は見たんだろう？ 仮にジョージと団長が本気で激突したなら、あの程度の被害では済まん」

ジョージさんの実力を、身内鼻肩抜きに高く評価している彼女らしい言葉に、私の中に立ち込めた暗雲が晴れてきた。

バーガーを食べ終えたのか、口元をナプキンで拭くと彼女は不敵な笑みを浮かべる。

「そら、2人の分もあるから食べておけ。しっかり食わなければ、体も頭も動かないぞ

？」

私達の方も別で買ってあったのか、小さめの紙袋を私に渡すと副団長はどこかへと去って行った。

一方その頃。

「今日は、どのあたりを見回りますか？」

「とりあえず、昨夜戦った場所に行ってみよう。【NIGHTMARE王宮騎士団】が既に調査を終えているかもしれないけれど、手掛かりがあるかもしれない」

と、ジュンさんと話をしながら歩いていると、突然。

「な、何をするっ!? やめろおっ！」

「オオオッ！」

人の悲鳴と、剣と剣がぶつかる音が響いた。まさか、昨夜の魔物が回復でもして暴れているのだろうか？

「どうした！」

悲鳴のあった場所では、【NIGHTMARE王宮騎士団】の団員同士が鏢ぜり合いを繰り広げていた。だが様子がおかしい。片方は困惑しているのか防衛に徹している。

戦いを止めようと、2人の間にジュンさんが割って入る。

「やめろ!」【NIGHTMARE王宮騎士団】の団員が、街の人々に迷惑をかけるんじゃない!」

「その声は、団長ですか!?!」

「ああ。何があつたのか知らないが、決闘ならばせめて時と場所を——」

「違うんです! そいつがいきなり襲い掛かってきて……」

「オオオツ——!」

兜の下は涙目になっているのか、情けない声で弁明する騎士。それに対し、相手の騎士はうめき声をあげながら剣を振り回してジュンさんに襲い掛かる。

「っ、このっ!」

相手の攻撃を剣で防ぎ、蹴りを入れて突き飛ばす。よろめく騎士に俺は背後から掴みかかり——

「フンツ!」

力を込めて裏投げで後方に投げ飛ばす。

「(おかしいな。今の騎士、鎧を纏っていたにしてはやけに軽かった)」

投げた勢いと衝撃の影響か、騎士の兜が転がった。そして……。

「なっ!?!」

「ひいいいっ!?! く、首が無い!?!」

起き上がった騎士は、頭が無かった。いや、頭どころか肉体そのものが無かった。

「ジュンさん。こいつ、もしかしたら昨夜の」

「おそらく、あのモンスターの同種だろう。ほら、君も怖がっていないで、構えるんだ！  
こういう時のために訓練を重ねてきたんじゃないのか？」

「はっ、はい！」

だったら躊躇う必要は無い。恐怖で膝が笑っていた騎士の尻を叩いて戦うように  
ジュンさんが指示を出すと、向こうも剣を抜いて構える。

「かかってこい！」

「グオオオッ！」

魔物が剣を振り上げ、NIGHTMARE【王宮騎士団】の団員に斬りかかってくる。彼は攻撃を受け止  
め、下半身に力を入れて踏ん張る。

「せーの！」

その横から、俺とジュンさんの蹴りで魔物の膝を攻撃し、破壊する。

バランスを崩し、うつ伏せに倒れた魔物に間髪入れず。

「フンッ！」

「伏せ！」

「寝ている！」

「ガアアアッ！」

起き上がろうとした魔物の肘と肩の関節部分を踏み潰し、動きを封じる。

ダメージの影響か、魔物は指の部分を小刻みに震わせる。

「……よし。後は——」

「うわああああっ！」

「出たぞおお！逃げろおおっ！」

「止めてください！ジュンさん！」

「ジュンさん！自分のことがわからないんですか!？」

安心したのも束の間、街のあちこちから悲鳴が聞こえてきた。……おいちよつと待て、今『ジュンさん』って聞こえたぞ？まさか、昨日のあれが出たのか？しかもよりもよつて、マツリさんとトモさんが相手か。あの2人にあれの相手は精神的にキツイだろう。

「すまない、こいつは君に任せた！私はジョージ君と他の団員の応援に向かう！」

「はっ！」

「行くよ、ジョージ君」

「わかりました」

倒れた魔物を騎士に任せて、俺とジュンさんは声のした方向に駆け出した。

「マツリちゃん！トモちゃん！そいつは鎧の姿を模した魔物だ！」

「わかりました！」

「団長の名誉を侮辱した報い、受けさせてやるっす！」

鎧の人物と戦っていたトモさんとマツリさんは、ジュンさんの助言を聞くなり魔物の膝を切断し、飛び蹴りで仰向けに倒す。そして得物の剣を奪って胴体に突き刺し、地面に固定した。行動に移すのが早い。

駄々っ子のように四肢を振るって起き上がろうと抵抗する魔物の手足をロープで縛り、動きを封じる。

「相手が人間か魔物か分からない時は、こうして兜を脱がせるんだ。それに、手足をロープなどで縛れば簡単に無力化できる。他の団員達にも、そう伝えてきてくれ」

「はい！」

ジュンさんが魔物の頭部を掲げながら指示を飛ばす。2人もそれに従い、他の団員のところに向かおうとしたが――。

「残念だが団長、今すぐ指示を変更したほうがよさそうだぞ」

どこからともなく姉上、クリステイナ・モーガンが現れて待ったをかけた。

「どういうことだい？クリスちゃん」

「あれを見ろ」

姉上が切っ先を向けた先には、民家ほどの大きさの魔物がこちらに歩いて来ていた。「なっ!?!」

その魔物は俺達が捕縛した魔物の方を向くと、腕を文字通り伸ばして掴み取り、そのまま取り込んだ。

「一体なんなんすかあれは!?! 鎧を模した魔物といい、あのでかい魔物といい……」

「あれは『リビンググメール』と呼ばれる魔物だ。団長、ジョージ、金属製の武器がひとりで動き出したという話を聞いた事はないか?」

混乱状態のマツリさんの頭を姉上がそつと撫でて落ち着かせながら、俺と団長に訊ねた。

「ああ、剣が飛びまわったり、鎧が勝手に出歩いたりしたって話か」

「私も。あれはてつきり、おとぎ話の類だと思っただけだけど、まさか実在していたとは……」

俺とジュンさんの反応を見た姉上が、『リビンググメール』という魔物について更に詳しく説明した。

今はあんな巨体だが、もともとは微生物の群体であるらしい。

その微生物は金属を捕食し、成り代わるといふ性質を持っており、金属製の武器や防具が大量生産された戦時中に、こいつらは爆発的に増殖していたらしい。

当時、軍隊としての役割を担った【NIGHTMARE王宮騎士団】によって討伐されたけれど、その生き残りが増えすぎた結果餌を求め、暴れだしたのが一連の騒動の真相のようだ。

「でも、どうするんですか？金属製の武器や防具を捕食する性質上、私達だと接近戦は難しいんじゃないですか？」

と、トモさんがジュンさんと姉上に問いかける。

「安心しろ、そのために、ちよつと待てジョージ、何をするつもりだ」「ぐえっ」

俺の中で考えた作戦を実行しようと思つたら姉上に襟首を掴まれた。

「いや、俺の仲間を呼ぶついでに丸太を何処かで調達して、あの魔物を叩き潰して小さくして、魔法で細胞の一片まで焼いてやろうと……」

「やめんか馬鹿者。確かにその方法で倒された個体もいるが、もう少し文明の利器に頼れ」

「つまり、あの魔物をどうにかする策があるんだね？クリスマスちゃん」

ジュンさんの言葉を待つていたと言わんばかりに、姉上が口角を吊り上げて笑う。

「その通り！こんなこともあろうかと、私は陛下にある魔法兵器の使用について交渉していたのさ。幸い、相手は集まって一塊になっている。ここはひとつ、派手にいこうじゃないか」



姉上の言った兵器とやらが、見計らったように団員達に運ばれてきた。

石の筒と木製の土台で構成された、大砲のようなもの。姉上曰く、試作品のため見栄えは悪いが、金属すら融解させる超高温の熱戦を放つという。

「さて、この兵器は非常に威力が高い。そのため、近隣の建築物に被害が出ないようにしなければならぬが……せつかくだ、ジョージは自分の仲間を呼んでこい。その間、あの魔物の足止めは私達で行う。戻ってきたら、あの魔物を思いつきり空中に打ち上げてくれ。そこにこの大砲の一撃を撃ち込んで、チェックメイトだ」

「……了解」

姉上の指示を受けて、俺は仲間達を通信魔法で呼んだ。

「暫くお待ちください」

「「待たせたな」」

「じゃあ、さつき通信した通り動くぞ。ジュンさん！トモさん！マツリさん！下がってください！」

「分かった！」

「了解！」

「了解っす！」

「「「《パンプアップ》！」」」

集まったメンバーで横一列になる。そして魔法で物理攻撃力を上昇させ、魔物に向かつて突撃する。俺達と入れ替わるように、ジユンさん達が後退する。

「ふんっ！」

攻撃を掻い潜り、2人ずつ魔物の脚にしがみつき、足と地面の間に指をねじ込む。そして歯を食いしばって背筋の力を使って――。

「「どすこーい！」」

魔物を上空に投げ上げる。空高く舞い上がった魔物が、ある程度の高さで一瞬停止する。

「3数える間に私の後ろに下がれ！人体にかすれば骨も残らんどー3ー2ー！」

息を整える間もなく飛ばされた指示に従い、全身に鞭を打って姉上のより後ろに下がる。

「1ーナイトメア大砲、発射！」

落下のタイミングに合わせて放たれた極太の熱線が、魔物を包み込む。射出された反動か、凄まじい衝撃波で転びそうになった。

「おお……」

衝撃波が止んだので空を見上げてみれば、魔物は蒸発して消し飛んでいた。

こうして、街を騒がせていた魔物は討伐された。

探知魔法を使って魔物の残党を搜索し、殲滅する作業が残っていたけど、それは  
NIGHTMARE  
【王宮騎士団】のお仕事なので俺達は関係無い。

……まあ、生き残りに遭遇したら倒すくらいのはするけれど。

数日後。 王城門前。

「(……今日もランドソルは平和だな)」

例の騒動が収束し、私にかけられていた疑いも晴れ、こうして職場復帰することができた。

「団長。 ちょーつと聞きたいことがあるのだが、構わないね？」

「うん」

いつも通り全身鎧に身を包み、王城門前で門番の仕事をしていると、クリスちゃんに声をかけられた。

「例の騒動の間なんだが、団長は何処にいたのかな？ 実家の方にはいなかったようだし、近隣の宿屋にもそれらしい人物はいなかったぞ？」

私の肩に腕を回し、顔を思いっきり近づけてクリスちゃんが問いかける。

「ジョージ君のところまで暫く世話になっていたよ」

「ここは下手に誤魔化したりとぼけたりせず、正直に言うに限る。というか、彼女もそれを分かったうえで聞いているのだろう。」

「ほはおくう……つまり、ジョージと寝食を共にした、ということだな？」

満面の笑みを浮かべているけれど、圧力が凄い。というか、嫉妬と羨望の念をひしひしと感じる。

「まさかとは思うが、同衾などは……」

「していないよ。私はベッドを借りて、ジョージ君は自前の寝袋を使って寝ていたよ」

私の回答がどこか気に入らなかつたのか、クリスちゃんは大きなため息をつくと私から離れる。

「つまらんなく。年頃の男女が一つ屋根の下で寝食を共にしながら、何も無いとは。それとも、ジョージに男としての魅力が無いと思っっているのかな？」

「（また始まった……）」

大剣の鞘を撫でながら、クリスちゃんが私に詰め寄る。魅力が無いと言えば怒って暴れるだろうし、魅力があると答えれば嫁に相応しいか確かめると称して斬りかかってくるだろう。相変わらずジョージ君へのブラコンを拗らせているし、この手の話題の時だと面倒くさいことになる。

「高身長の美形で性格良し。甲斐性もそれなりに有り。ナニもご立派。私の自慢の

ジョージはこれ以上ない位の優良物件だといふのにな」

「ぶっぶおおう!」

クリスマスちゃんが小声で言ったとんでもない情報に思わず吹き出す。飲み物を口に含んでいたら盛大にぶちまけていたのは確定的に明らかだ。

私は深呼吸をして、クリスマスちゃんの質問に対する回答を考える。……そうだ!これ以上ない位クリスマスちゃんに効く回答を思いついた!ジョージ君も百点満点を出してくれるだろう。

「クリスマスちゃんのようなおっかない人が親戚にいるのはちよつとね。だいたい、クリスマスちゃんはジョージ君の心配ができる立場じゃ」

「さて、私は仕事に戻るとするか。まだまだ面倒な事務作業が残っていたんだ。それじゃあ」

私の回答を最後まで聞くよりも早く、クリスマスちゃんは足早に王宮内へと戻って行った。

「(……後でトモちゃんとマツリちゃんに教えよう)」

今のようにすればクリスマスちゃんを撃退できると。

一方その頃。

「グワーツ！」

「その調子です晶。そのままジョージの関節を極めておいてください」

「オツケー」

いつもの拠点に来るなり晶さんに掴まり、そのままアームロックを極められた。杖で狙いを定めているのか、背後にいるネネカさんが俺の尻を突いている。

「晶さん！いきなり何をするんですか！」

「合コンで女の子をお持ち帰りするだけでなく、二股までかけていた悪党へのお仕置きだよ。さあ、ネネカ。思いつきりやっちゃって！」

誤解だと伝えたお持ち帰りは別として、身に覚えのない二股疑惑までかかっていた。何故だ!?

「そもそも交際している相手がいらないから二股をかけようにもかけられないですけどお!?! 弁明！弁明させてください！」

必死の訴えが届いたのか、晶さんの拘束が解かれる。危なかった、あのままいたら肩と尻が死ぬところだった。

「まずお持ち帰りは誤解で、俺の隣の部屋の住人だったって偶然起こった事なんです」

「ふうん。まあそういうことにしておくよ」

なんで素直に受け止めてくれないんだ。ニヤニヤ笑顔が凄く腹立つ。

「……続けますね。二股疑惑なんですけど、俺と蘭さんが晶さんのクレープ屋台に一緒に行つた時のこと言ってます?」

「うん。黒髪ロングの大人しそうなあの子だよ」

「彼女が俺の隣の部屋の住人です」

「なるほど、そういうことか。いやこれは失礼。まあそれはそれとして」

「いっつ!」

晶さんが爪先で地面を叩いたと思つたら、俺の頭頂部に硬い物体が激突した。権能使つて天井の形を変えたな!?

「外でならともかく、君の部屋で2人つきりで飲み食いする程度に親密な女性が寝ているのに手を出さないのはどうかと思うよ? 『据え膳食わぬは男の恥』って言葉知らないの? そういうのを世間一般ではハタレって言うんだよ」

頭を押さえてのたうち回る俺に、晶さんは顔を覗き込むようにしゃがんで言う。

「異議あり。明確にそういった関係になつていない相手に手を出すのは紳士的とは言えません。仮にそうだったとしても、命中した時のことを考えて我慢するということのも選択肢の一つです」

そこに、いつの間に着替えたのかスーツ姿のネネカさんが異議を唱えた。丁寧に弁護士バツジも着けている。

「いやいや。『帰りたくない』っていうのは彼女なりに遠回しに誘っているんだよ。だから手を出さないのは有罪<sup>ギルティ</sup>。命申しないようにするための備えだって、近くのコンビニなり薬局なりで買えばいいじゃない」

負けじと晶さんが反論し、始まる議論。

「……ラジラジさん。なんで晶さんとネネカさんはあそこまで俺に構うんです?」

「非常に申し上げにくいのですが……彼女達にとって女装した君はアイドルのような人がありまして。その影響でしょう」

「……本当ですか?」

俺の問いにラジラジさんは首肯すると、写真を3枚取り出した。そこには――。

姉という強権に屈し、姉達のお下がりを着せられた小さい頃の俺。

再び姉という強権に屈して出場し、高校の文化祭の女装コンテストで3年連続優勝を成し遂げた、セーラー服姿の俺。

もうコスプレの範囲内で楽しもうと吹っ切れ、口元を扇子で隠して妖艶に目を細める、同人イベントで八雲紫のコスプレをする俺。

俺の女装写真をクリスマス姉から受け取った時の晶さんとネネカさんは、アイドルのグッ



ズを入手して喜ぶフアンのようなリアクションを見せるらしい。

とりあえず、現実に戻還したらクリス姉に2回くらい張り手をかましてやろう。俺はそう決心しながら、頭頂部に回復薬を塗った。

王宮内部。玉座の間。

「陛下。『リビンググメイル』の破片を回収してまいりました」

「ありがとう、キヤル。下がっていいわよ」

「はい」

キヤルが立ち上がり、玉座の間を去ると、私は手の中にある瓶をかざす。

中に入っているのは、例の騒動を引き起こした魔物の破片。

【NIGHTMARE王宮騎士団】が金属探知魔法で探知するよりも早く回収するよう命じた結果、集まったのは小さめの瓶1杯に詰められる程度。

まあ、量が少ないのは別に問題ない。適当な鉱山に放り込むなり、金属製の廃棄物を集めて餌として与えるなりして数を増やせば良い。

目的は、あれ以上の大きさとパワーを有した個体に育て上げること。

「（今私が進めている計画の通りに魔力を集め、私自身のパワーを底上げする。そこに育

ち切ったこの魔物を追加すれば……）」

忌々しいあの存在に勝てるかもしれない。

前回は単騎で挑み、敗北を喫した。

ならば今度は、シンプルに巨大でパワフルな従僕を投入して押し潰す。

「嗚呼、楽しみだわ……」

私に挑むためにコソコソ活動している愚者達が敗北する姿を見るその時が。特に私と対等な立場になろうとしたあの小僧が絶望に顔を歪ませ、地に倒れ伏す姿はさぞ見ものだろう。

「待っていなさい……エリス」

忌々しい怨敵を打ち倒す瞬間を思い浮かべながら私は、口角を吊り上げて嗤った。

## 設定集（随時加筆します）

・ジョージ・モーガン

アストルム内での讓司。クリステイーナは母方の従姉であり、生まれは極東の山奥の豪雪地域。

背は高く、整った顔付きの美形。母親讓りの金髪と、父親讓りの黒目が特徴。『迷えば、敗れる』というある人の言葉に感銘を受けており、相手が誰だろうと敵は必ず倒し、味方は必ず守る。とても慈悲深く。とても冷酷な性格。

周りの女性が心身共にパワフルだった影響から女性のことを尊敬しており、年齢の上下問わず敬称をつけて呼んでいる。但し、相手からの要望があれば呼び捨てや愛称などで呼ぶ。

どんなに大金を積まれようと素性不明の依頼人からの仕事は怪しいからと断固拒否する。代理人を介した依頼だろうと例外無し。

姉が家業を継いで暇を持て余していたので、職を求めて従姉の伝手を使って【NIGHTMARE王宮騎士団】に加入。後にある目的から、かつて自分が団長を勤めていた【ニャルラトホテツプ教団】を再結成。人員と武器の確保のために活動中。

趣味はゲーム全般と読書とコスプレ。

距離を問わず戦えるパワーファイターで、特に弓や槍を使った中々遠距離戦を好む。

実はクリスティーナのプリンセスナイト。能力は『透明化』。この能力は、世界が再構築される間にクリスティーナから譲渡されたもの。

### ・西条譲司

リアル（夢の世界）のジョージ。

「大卒の方が給料を多く貰える」という理由から大学に進学。4月15日生まれの子十歳。アストルム内と性格に差異は無い。

『七冠』セブンクラウンズのメンバーにして従姉であるクリスティーナのプライベートの姿を見てきたことから、「天才と呼ばれる人も根本はただの人間」、「他人と違う『何か』を大なり小なり持っているのが人間という生き物」という考えを持っている。

小さい頃は姉という強権に屈して着せ替え人形となっていたが、高校の文化祭の女装コンテストで3年連続優勝を経験して吹っ切れたのか、コスプレの範囲内で女装を楽しむように。なお本人は知らないが、女装したジョージに初恋を経験した者や、ジョージの女装姿を見て性癖が捻じれた人間が何名かいる。

リアルでは柔道と剣道をそれぞれ3年、親戚の住む鹿児島で薬丸自顕流を1週間ほど教わるなど結構武闘派だったりする。

・クリステイナ・モーガン

ジョージの母方の従姉にして『セブンクラウンズ』の1人、『レジーナゲッッシュ』。いい年していまだにブラコンを拗らせている。

リアルでは休暇をジョージの実家で過ごしているため、近所の方とはそれなりに交流が有る。

ジョージが一人暮らしを始めてからは、仕事で近くに来る用事があれば一緒に食事に行ったり、抜き打ちで生活ぶりのチェックに向かうようになった。

最近、両親からの「孫の顔が見たい」コールで耳に舐舐ができてきた。

ジョージにプリンセスナイトの権能を授けた代償に世界から受ける認識改変を肩代わりしたため、彼女だけ『セブンクラウンズ』で唯一ゲームを現実だと認識している。

・蘭

リアルなジョージのお隣さんにして友人で年は同じ。黒髪ロングの大人しそうな女性。

ジョージとかなり親密な関係にあるようだが……？

・【ニャルラトホテップ教団】

団長、西条讓司（ジョージ・モーガン）

表向きの活動目的は「善行を積み、神の依代に相応しい機械を作り出し、地上に神を降臨させる」

実際の活動目的は「世界の謎を解明し、現実世界へ帰還する。ついでに元凶である『カイザーインサイト覇瞳皇帝』を玉座から引きずり降ろしてぶっ飛ばす」

エンブレムは「時計の長針と短針」

ジョージの「ミネルヴァたんカワイイヤッター！」を合言葉に集まったオタク集団。構成員の数は108人。

特徴として、メンバーは黒コートに文字盤の書かれた仮面を装着している。モデルはボンドルドの探窟隊『アシフラハンズ祈手』

・【ニャルラトホテップ教団】団員の基本装備

鎖帷子：上半身を覆う長袖のものを使用

胸当て：鎖帷子の上から胸部と背面を挟むように装着する。金属製

籠手：肘から手の甲を覆う。金属製

グローブ：籠手の下に装備する。布製

脛当て：ベルトで固定する。金属製

靴：靴底に金属板を仕込んだ半長靴

仮面：文字盤が書かれており、防具も兼ねているためそれなりに硬い。種族によって耳や角を通すための穴が空いている

フード付きのロングコート及び長ズボン：黒いだけのただのコートとズボン

武器：団員によって多種多様。特に制限はない

## 何でもない夏休みのある日

あれは、俺が大学1年の時の事。

「あつつい」

その日は天気予報の通り、人間の体温36度を超える猛暑日だった。

パントー丁で扇風機の風に当たっていたが、もう我慢の限界。

扇風機の電源を切って汗を拭い、寝間着を着てエアコンの電源を入れる。

「あく、涼しい〜……」

ベッドで横になり、エアコンの涼しさを堪能する。

「そういえば、昼どうすつか。一応米は炊いてあるんだけど……」

などと考えながらゴロゴロしている——。

不意に玄関のチャイムが鳴った。

「はい、今行きますよー」

起き上がった俺は玄関に向かい、鍵を開けてドアを開ける。そこに立っていたのは

……。

「久しぶりだな、ジョージ」



仕事で日本に来ていたのか、仕事着姿の従姉、クリステイーナが立っていた。

「うん、久しぶり。急にどうしたの？」

「仕事で近くに来る用事があったな。お前と昼食でもと思ったんだが……昼は済ませたか？」

「ただだよ」

「それは良かった。ならば早速行こう。勿論、私の奢りでな」

「へーい」

寝間着から着替え、小さめの鞆に財布と免許証、鍵や携帯その他諸々を入れて俺は部屋を出た。

タダ飯やっただぜ。

「チャーハンのお客様は？」

「私だ」

「担々麺大盛りと餃子のお客様は……」

「俺です」

「では、ごゆっくり」

やってきたのは近くの中華料理屋。

お昼時だからか、店内はそれなりに席が埋まっていた。

……それと同時に、俺の方に視線もそれなりに集まっていた。

「まあ、無理も無いよな。『七冠』<sup>セブンクラウンズ</sup>の1人が、街の中華料理屋で男と飯食っているんだから」

こういうのも慣れたので、今は食事に集中する。

「一人暮らしは慣れたか？」

「あー、まあそれなりに。ただ、牛の世話や畑仕事が無くなってちよつと物足りなさを感じているぐらい」

「はっはっはっ。やはり習慣は抜けないものか」

「どうせ帰省したら嫌というほどやるだけだね。そういえば、今年の夏も休暇でウチに来るの？」

「そこはスケジュール次第だな。今年は特に忙しいから、夏はそつちに行けないかもしれない」

と、周囲の目を考慮して他愛のない会話を挿みながら食事をする。

俺にとつては『母方の従姉』でも、世間からすれば『天才』或いは『超人』なんだ。イメージを大きく崩すような話題を出してはいけない。何より、本人も仕事中はそれらし

い振る舞いをするよう無意識に心がけているようだ。

「そうだ、ジョージ。『例の件』だが、結論は出たか？」

クリス姉が言った『例の件』とは、『レジェンド・オブ・アストルム』というゲームで『七・冠』が選んだプレイヤー1人に、公式チートと言える特殊な能力を与えるというもの。彼ら彼女らから特殊な能力を与えられたプレイヤーは、『プリンセスナイト』と呼ばれている。

他の『七・冠』のメンバーは既に各自の『プリンセスナイト』を決めたいらしい。誰を選ぶか考えたところ、俺に白羽の矢が立ったのが1週間ほど前の事。考えるための猶予期間が、ちょうど今日だったんだ。

「悪いけど、ノーで」

「そうか……わかった。ならば、向こうで相対した時はお互い全力でぶつかろうよ」  
「うん」

それで話は終わり。後は黙々と迅速に箸（クリス姉はレンゲ）を進めて食事を終わらせた。

「ふむ、まだ時間があるな……。ジョージ、ついでにお前の部屋を見てもいいか？」  
会計が終わって店を出るとクリス姉に言われた。

「ここよ」

「ほう。あっさりと承諾するということは、きちんと部屋は片付いているんだな？ 楽しみだ♪」

くちエック中、暫くお待ちくださいく

「どう？」

「そうだな。ベッドの下などからいやらしい本を発見され、慌てふためくお前の姿が見れなくてつまらないから100点満点中……90点だ。だいたい、いやらしい本が一冊も無いとはどういうことだ？ お前もそつちの食欲旺盛で合法的に堂々と購入できる年齢になったというのに」

部屋を隅々まで見て回って、クリスマス姉が出した結果に俺は静かに怒った。

具体的に言う、今度実家で会ったら堆肥の山に頭から放り投げてやろうと考える程度には。

ぶっちゃけ、その手の本はほぼ電子書籍でしか買わない。だって、身内に性癖ばれて生温かい目で見られるのとか凄く恥ずかしいし。

……ほぼと言っただけで、クリスマス姉にもバレないように隠してある紙媒体の本が1冊も無いとは言っていないのは内緒。

「はいはい。で、時間の方はどうなの？」

けどそれは決して口に出さない。ぐっと堪えて壁に掛けてある時計を見るよう促す。

「ちようどいい時間だ。では、私は仕事に戻る」

「うん。行つてらっしゃーい」

では。と、クリス姉は手を挙げると、逃げるように部屋を出て行つた。

「はい、お疲れ様」

「はっ!？」

謎の声に起きてみれば、そこはどこかの庭のようだった。

周囲を囲むように生えた木と、花畑。池の中心にはとても大きな一輪の花が咲いている。

「眠気覚ましに一杯飲む?」

そう言いながらティーポットを傾けて何かを淹れていたのは、機械仕掛けの翼のようなものを背負つた少女。

目はけだるげに半開きになっており、口調もどこか間延びしている。

「貴女は……?」

「そういえば、自己紹介がまだだったわね。あたしはアメス。あんた達の味方よ」

聞けば、彼女は『レジエンド・オブ・アストルム』に閉じ込められたプレイヤー達の

現実世界での出来事を、『夢』という形で再現して見せているらしい。曰く、これで現実世界での記憶の回復を行っているんだとか。

「で、どうだった？ 久しぶりに現実世界を体験した感想は」

「そうですね……まあ、悪くはないんですけど強いて要望を挙げるなら、講義の記憶とかも再現して欲しいですね。これでも学生ですから」

「あんた、夢の中でも勉強するつもりなの？ 良いじゃない、夢の中くらいそういうの忘れても」

そう言って、アメスさんはカップを傾ける。

それでも、と、俺は続ける。

「試験を受けて単位を取得するためには普段の勉強が欠かせないんです。現実世界でどれだけ日数が経過したか分からないからこそ、遅れた分は取り返したいんです」

俺が熱弁すると、アメスさんは顎に手を当てて暫く考える。

「まあ、現実世界に帰還するために頑張っているようだし、その位やるってあげるわ。でも、他のプレイヤー達の記憶の再現もやってるから、直ぐには見せられないけどね」

「ありがとうございます」

アメスさんに深々と一礼したタイミングで、俺の体が発光した。

「そろそろ向こうで起きる時間ね。じゃあ、また会いましょ」

「ええ。また」

バイバイ。と、アメスさんは手を振るのに合わせて、俺も手を振った。

## 急変

ある日。いつもの拠点の一角にて。

「おい！何者だてめえらー！」

暴れない様に拘束された大柄な男性が、唾をまき散らしながら吠える。

男性の名前はダイゴ。ラジラジさんのプリンセスナイトだ。

数日前、アストライア大陸中に配置、調査をしていたネネカさんの分身の1人が彼を  
発見したと報告してきた。

俺達はそれを受け、すぐさま行動に移した。『カイザリンサイト覇瞳皇帝』に見つかり、NIGHTMARE【王宮騎士団】を

使って捕縛されるよりも前に。

「俺を拘束してどうするつもりだ！言っておくがなあ、捕まるような事は何もしていねえぞー！」

NIGHTMARE【王宮騎士団】にでも差し出されると考えたのか、彼はそんな事を言った。

「ジョージ、お待たせしました」

そこへ、大陸内の搜索を途中で切り上げたのか、権能を使ってラジラジさんがやって来た。



「次から次へと、今度は……」

誰だ。と言いかけたダイゴが、ラジラジさんの顔をまじまじと見つめる。

「あんた……俺と前にどっかで会ったか？」

反応から察するに、この世界を現実だと認識し、記憶が改変されているようだ。しかし、アメスさんが夢を見せていた影響か、臆げながらラジラジさんの事を覚えているようだ。

「ええ。確かに私と貴方は以前、会っています。詳しいことはまた後で話しますが、まずは貴方を取り巻く現状を教えましょう。……突拍子も無い話に感じるかもしれませんが、私が今から話す事は全て、事実です」

翌日。

「朗報です。先程、王城内部に侵入していた私の分身が、洗脳装置を発見したとのことです」

『?!?!』

ネネカさんの持つてきた情報を受け、その場に衝撃が走る。

晶さんが権能を使って壁に黒板を創り出し、そこにネネカさんがチョークを走らせ

る。

大まかな王城全体の見取り図を描いた後に、その装置があつたとされる区画に○で目印を付けた。

そこは、王城の地下階層。俺も見たことが無い区画だった。

「ありがたいございませす、ネネカさん。これで後は、こちらの戦力を揃えるだけですな」

別の日。

「どおりやああー！」

「よつと」

ノウエムが大剣を縦横無尽に振り回して繰り出す斬撃を躲し、或いは槍の穂先を刀身の腹に当てて逸らす。

彼女の振るっている剣の銘は天楼霸断剣。この世界がまだゲームだった頃に愛用していた武器で、今使っているのは晶さんが復元したレプリカ。使用に制限時間があるが、それを抜きにしてもかなり強力な武器だ。さつきから振るった余波で周囲の雑草が吹き飛んでいる。これを手足のように扱っているから、かなり使いこなしていたようだ。

「ふっ！」

制限時間が来たのか、ノウエムの剣が消滅した。以前ならこの一瞬について攻撃が通じたのだが……

「しっ！」

ノウエムはローリングで攻撃を回避すると、腰の短剣を抜いて斬りかかってきた。

小柄な体型を活かして地面を這うように動き回り、下半身を集中的に狙って攻撃してくる。前の手合わせで飛び掛かった時にカウンターで殴られて学習したのか、バッタの様に飛び跳ねるのを止めたようだ。

「はい。そこまで」

と、晶さんの声に合わせて俺とノウエムの間には黒い壁が出現した。

「そろそろ晩御飯だつてさ。戻るよ」

「はっ！」

更に数日後。事態は動いた。

「ドア閉めるぞー」

『うーっす』

拠点の倉庫に収納されている武器の整備を終え、扉を閉めて施錠する。

さて、これから晩飯にしよう。そう思っていたら……。

『ジョージ、緊急事態です。すぐに広間に来てください』

ネネカさんから通信魔法を使った連絡が届いた。

一体何事だろうか。ネネカさんの指示に従い広間に向かうと、そこにはエルフの少女とヒューマンの少年。ギルド【美食殿】のコッコロさんと、晶さんのプリンセスナイトのユウキが来ていた。

「初めまして。わたくしは、【美食殿】のコッコロと申します。実は【ニャルラトホテツプ教団】の皆様にご依頼があつて参りました」

彼女の依頼とは、【美食殿】のギルドマスターであるペコリーヌの救出。

どうやら、ペコリーヌが【NIGHTMARE王宮騎士団】に捕縛されてしまったらしい。それも同じギルドメンバーであり、『カイザーインサイト覇瞳皇帝』の手先だった、キャルという猫の獣人族ビーストの少女との戦いで疲弊していた隙を狙つて。

「以前、サレンさまよりお聞きしました。『私がない時か、私でもどうにも出来ない事件に巻き込まれた時は、ジョージ君を頼りなさい。きつと力になつてくれるわ』と。今回ばかりは、サレンさまでもどうにも出来ない事件のようです。どうかペコリーヌさまを……！」

「分かりました。彼女に何かあるとこちらも非常に困りますので、引き受けましょう」  
「ありがとうございます。と、コッコロさんとユウキが頭を下げる。」

「ジョージ、侵入ルートは？私も同行しましょう」

「姿を消して王城の裏口から牢まで行きます」

「なるほど。では私は権能で変身し、貴方に同行しましょう」

「ラジラジさん、彼女を確保したら通信魔法で知らせるので、外で暴れて【王宮騎士団】  
NIGHTMARE  
の注意を引いてください」

「わかりました。ちようど、久しぶりに体を動かしたいと思つていたところですよ」

「派手にいきましよう。と、ラジラジさんは首の骨をゴキゴキと鳴らす。」

「あの、わたくし達に何かできることはございませんか？」

「コッコロさんが、手を挙げて俺達に問いかける。仲間の窮地を救いたいと、目で訴えてくる。ユウキも続いて手伝うことが無いか訊ねてくる。」

正直な所、2人を連れていくわけにはいかない。場所は『カイザレイサット覇瞳皇帝』の根城だ。ユウキに何かあれば晶さんは絶対に何か無茶な事をするだろう。それだけは避けたい。なので――。

「駄目です」

「ネネカ様!? どうし、っ!? きゅ、急に、眠気、が……」

ネネカさんが魔法を使ってコッコロさんとユウキを眠らせる。

2人を抱えて拠点の一角に運び、そこでネネカさんの分身をベッドに変身させて寝かせる。

そして、2人が目を覚ました後の世話をマサキさんに……頼もうとしたらシズルさんがおそろしく速い手刀でマサキさんの意識を刈り取り、自分達姉妹がやると言ったので彼女達に任せ、現在は王城内部。

前の職場だった事もあり、牢がある区画まではスムーズに移動できている。途中、人とすれ違いそうになった時にどうしても回避できず、天井に張り付いたりしながら。問題は……

「……」

入り口付近の椅子に座りこみ、誰も脱走などさせないという熱意を全身から発している騎士。通常なら背後から首筋に睡眠薬を注射器で打ち込み、眠っている間に素早く作戦を遂行したい。しかし目の前の騎士は、着込んでいる鎧の形状のせいで首筋に注射器を打ち込むことができない。

「……は私が行きましよう」

俺の耳元でそう囁いたネネカさんは、蟻に変身して騎士の鎧まで移動した。そして隙間から入り込んで……

「……ん？うわああっ！む、虫がっ！虫が鎧の中で動き回ってる！」

慌てふためいた騎士は虫を追い出すためか、鎧をポイポイと脱ぎ捨ててパンツ一丁になった。騎士の背後でネネカさんが変身したと思われるピンク色の蝶が羽ばたいているのを確認した俺はすかさず。

「いつ!?なんだ？今何か肩がチクツと……」

肩をさする騎士だが、特に気にするわけでもなく鎧を装備し、再び椅子に座りこんだ。それから数分後――。

「ぐーっ……」

睡眠薬が回って効力を発揮したのか、鼾をかいて眠りこけた。

俺とネネカさんは騎士の前を堂々と横切り、目的の牢まで移動した。

そこには元気をなくしてしまったのか、へたり込んでいるペコリーヌ。もとい、ユースティアナ・フォン・アストライア陛下の姿が。頭頂部のアホ毛も、萎びた植物のように波打ち、へによりと垂れている。

「っ!?誰ですか!?!」

俺とネネカさんに気づいたのか、跳ね起きた彼女は立ち上がって身構える。

「俺は『ニヤルラトホテツプ教団』団長、ジョージ・モーガン。こちらは『メタモルレグナント変貌大妃』のネネカさん。貴女のギルドメンバーのコツコロさんとユウキの依頼を受けて、救出に参

りました」

「コッコロちゃんとかユウキくんが!？」

つまり2人は無事なんですね。と、彼女は安堵したのか胸を撫でおろした。

「下がってください。今、鉄格子を斬ります」

刀を抜きながら言うのと彼女は壁際まで下がり、親指を立てる。

「■■■■ーッ!」

猿叫を上げながら鉄格子を切断し、人が通り抜けることができるスペースを作る。

「では、急いでここを出しましょう。貴女にこんな薄暗くて狭い場所は似合わない」

「はい!」

「ラジラジ、派手に暴れなさい。但し、死傷者は出さない程度に加減するように」

彼女が牢を出たタイミングでネネカさんが通信魔法を使ってラジラジさんに通信魔法で合図を出す。ラジラジさんの対処に駆り出されたのか、慌ただしく騎士達がこの区画を通り過ぎていく音が聞こえた。そして、3人で牢のある区画を脱出したその時、不意に足元が光輝いた。

「これはっ!？」

「ラジラジさんの権能?」

「いえ、これはラジラジの権能によるものではありません。……まさかっ!？」



ネネカさんはこれに心当たりがあつたのか、驚愕に目を見開いたのと同時に俺達は光に包まれていき――。

「(トト)は……」

俺達が転移してきた場所は、平原を囲むように山々が聳え立っていた。

俺の両隣にネネカさんと陛下がいることから、散り散りになつてはいないようだ。問題は、誰がこんなことをしたかだが……。

「おやおや。おやおやおやおや。誰かと思えば、私の可愛い可愛いジョージと、ティアナではないか？」

と、この場にはいないはずのクリス姉の声が。

「姉上。なぜ貴女がここに？仕事はどうしたんですか？」

「うむ。城の外で男が暴れているというので、現場に向かっていたら足元が光り輝いてな。そしたらここにいた、というわけだ」

クリス姉はそう言うと、辺りを見渡す。

「ジョージ。どうやら貴方達も、ここに転移させられたようですね」

声のした方向を振り向けば、ラジラジさんが立っていた。更に後ろには、晶さんとノ

ウエムまでいた。

「晶さん！それにノウエムも！どうしてここに!？」

「いやあ、ペコリーヌちゃんか捕縛されたって聞いて居ても立つても居られなくなつてね。拠点飛び出してランドソルに向かおうとしたら——」

「いきなり晶が拠点を飛び出したから後を追つたら——」

「なぜかここに転移させられた」

2人は息びつたりにそう言った。打ち合わせでもしてました？

と、？気な事を考えている場合じゃない。今はここから拠点まで戻るルートを考えない。

「というかこれ、かなり不味い状況だよ。周りは山で囲まれていて外からは何があつたか良く見えない。それに私の記憶が正しければ、この辺りに集落の類は無い」

「どうやら、彼女を捕縛したのはこのためのようですね」

晶さんとネネカさんは何かを察したのか、悔し気に奥歯を噛む。

『海老で鯛を釣る』。私の好きな言葉だつて言ったの、覚えているかしら。晶？」

上空から響いた女性の声。声の主を探して空を見え下れば、そこにいたのは——。

「真那……ッ！」

「やっぱり、君だったか」

「よー、ネカマ野郎」

俺達が倒すべき敵その1。『カイザレイグ覇瞳皇帝』こと千里真那が上空に佇んでいた。

奴が短剣を構えて嗜虐的な笑みを浮かべた……次の瞬間。

「陛下。その、姿は……」

姿の変貌ぶりに、クリス姉が息を？む。

奴の姿は白い和服のような衣装から反転して、漆黒のドレスのように変化した。背後に浮かんでいた黄金の装飾品も、漆黒のファンネルのような物体に変化した。

何より一番変わったのは本人が放つ気配。以前城で見かけた時とは桁違いに強くなっているのが伝わってきて、押し潰されそうだ。

「この私、ユースティアナ・フォン・アストライアが。直々に貴方達を断罪してあげるわ」  
自分の本名を軽々しく口にされたことに苛立ったのか、剣を握る陛下の手が小刻みに震えていた。

剣の切っ先をこちらに向けると、俺達への精神攻撃なのか、奴は現状の説明をした。

国中から集めた魔法使い達が周囲の山々を囲み、結界を構築しているため逃げ場は無い。勿論、ラジラジさんの権能をもってしても。

そして、自分が今から放つ攻撃は核兵器並みの威力を持つ戦略級魔法だと。

魔法攻撃はゲームシステム的に必ず当たると設定されているから、クリス姉の権能

による『絶対防御』による回避はできない。晶さんの権能でオブジェクトを変更したとしても、火力と範囲を考えたらどうあがいても間に合わない。

どう攻略する？手っ取り早く『やられる前にやる』を実行したいところだけど、あつちの権能は『未来予知』だ。こつちがどう動いても対処されてゲームオーバーになる。

「大丈夫。ここは私に任せて」

思考に没頭していた俺の肩に晶さんが手を置いて、自信満々にウィンクする。取り敢えず、慌てず騒がず大人しく待っているように指示が出された。

「消えなさい。私が君臨する新世界に、貴方達は不要よ」

千里真那の短剣の先から赤と黒の入り混じった極太の光線が放たれ、俺達を飲み込む

——その間際。

「ノウエム、ちよつと借りるよ。ラジラジ」

晶さんがノウエムのブローチを手に取り、ラジラジさんの背中に手を当てる。ブローチが青白く輝き、晶さんを経由してラジラジさんの体に光が流れ込んでいった。

そしてラジラジさんを中心に円陣のようなものが展開されて、俺達は——。

「マスター！それに皆さん、大丈夫ですか!？」

ユウキとコッコロさんの世話をしていたシズルさんが、気配を感じ取ったのか俺達が転移してきた部屋に飛び込んできた。

光に飲まれた俺達は、拠点に戻って来ていた。晶さん曰く、ノウエムのブローチを使つてラジラジさんを強化し、ここに全員を転移させたいらしい。全員というのは、クリス姉と陛下もこちらに転移してきている。

「俺達は大丈夫です。それよりも晶さんを」

その代償に、晶さんは生命力と魔力を使い果たしたのか、かなり弱っている。こうして俺が肩を貸していないと、倒れこんでしまう程に。

「ジョージ君、私はそろそろ気を失うかもしれない」

「弱音を吐くなんて、晶さんらしくないですよ。持っている回復薬ありつたけ使つてでも復活させますから」

「いやいや、これも作戦のうちなんだよ。詳しいことは君のポケットに入れたメモに書いてあるから」

などと言っている晶さんだけど、そろそろ限界も近いのか顔色が悪化してきた。

晶さんをベッドに寝かせ、言われた通りにポケットを探してみると何かのメモが記された紙が入っていた。一体いつの間に？

「じゃあ、おやすみ……」

ベッドで横になったまま俺に笑顔でサムズアップを向けた直後。晶さんは静かに目を閉じ、気を失った。

本物のユースティアナを救助するために、仲間を1人失った。

そんな喪失感を振り払うように、晶さんが残したメモに目を通した。

ジョージ君へ。

真那の性格を考えれば、何処かのタイミングで私達を始末しに来ると思う。そしてその時は自分の手で、尚且つ圧倒的優位性を見せつけてくるかもしれない。

もしそうなった時、私は敢えて攻撃を受け、意識不明の重体になってみようと思う。

これは仮説だけど、こちらで意識を失えば『現実』で目を覚ませるかもしれない。

元々、『レジェンド・オブ・アストルム』をプレイしている間、プレイヤーの肉体は軽い睡眠状態になる。だから、こっちでも眠れば戻れるのではないかと思っただけで、そうはならなかった。だから今度は、こっちで意識を失うことで『現実』で目覚めることができるか、と考えた。

勿論、相応の覚悟が必要だ。戻れる確証は無いし、こっちの戦力が欠けてしまう。最悪の場合、魂がどちらにもいけず、『現実』とこちらの狭間を延々と彷徨うことになるか

もしれない。

でもやるしかない。誰かが試さなくちゃならないんだ。

だから、私はこの方法を試そうと思う。これは、『ミネルヴァ』と、『レジエンド・オブ・アストルム』の製作に関わった、七セブン冠クラウンズの一員としてのケジメでもある。

その時は、私の肉体が真那の手に渡らないよう、全力で確保して安全な場所で保管して欲しい。……できればふかふかのベッドで寝かせて貰えると嬉しい。

これが成功しても、失敗しても、君達は目的達成のための準備を進めて欲しい。何なら、目的を達成してくれていても構わない。それで足を止めたら真那が増強してしまうし、『現実』あちらにかかる負担が増えるだけだ。

だから——後は皆に任せた。

追伸。私を寝かせる時は髪を解いて、ちゃんと眼鏡を外してね？特に眼鏡は大事にすること！あれ、お気に入りのデザインだから。

「……意図は分かりました。分かりましたけど」

緊急だったとはいえ、せめて意識があるうちに伝えて欲しかったなあ。

## 嵐の前触れ

翌朝早く。

拠点の一室でノウエムが黒板にチョークを走らせ、分かり易い説明をしている。

「——というわけなんだ」

椅子に座るクリス姉、コッコロさん、陛下、ユウキの4人がノウエムの話に耳を傾けていた。

話の内容はズバリ、『この世界は作り物であり。本来自分達がいるべき世界が別にあり』と、『打倒「カイザインサイト覇瞳皇帝」のために戦力を集めている』の2つ。

4人とも、突拍子もない話に首を傾げているが、妙に納得できるという感想を口にしていった。

「つまりジョージ。お前が『ニヤルラトホテップ教団』を再結成した理由は、この大陸の何処かにいるティアナを発見し、陛下を玉座から引きずりおろすためか？」

「ええ」

脚を組んで椅子に座り、ふんぞり返っていたクリス姉が陛下を一瞥した後、俺の顔を見てニヤニヤと笑う。



「それで？この話をしたという事は、私を戦力に加えようと思っているのか？言っておくが、相応の対価が無ければ私は加勢しないぞ。場合によってはこの拠点を飛び出してランドソルに帰り、【王宮騎士団】<sup>NIGHTMARE</sup>に情報を洗いざらい吐き、ここに殴り込みをかけるぞ」  
♪

クリス姉は意地の悪い笑顔を浮かべ、右手をこちらに差し出した。

「こちら側にいれば、全力の団長や陛下と戦えますよ。敵対すれば、向こうは全力で姉上を倒しにくる筈です」

「乗った。団長と本気で戦える機会など、そうそうないからな」

俺の提示した報酬を聞いたクリス姉は獰猛な笑みを浮かべ、力強いサムズアップを向ける。

【美食殿】のコツコロさん、陛下、ユウキの3人は仲間であるキャルさんと国を救うため、協力したいと申し出た。

彼女達の動向を把握しておくためにも、その方がありがたい。実際、それを怠ったせいで陛下が捕縛されてしまったわけだし。

「では、お部屋にご案内いたします」

「弟くん！お部屋は私とリノちゃんと同じにしよっ！」

「いやいやお姉ちゃん！そこは常識的に男女別でしょう！」

「リノさまのおっしやる通りでございませう！ ですから、主さまから離れてくださいませ！」

彼女達も暫くこの拠点で寝泊まりすることになったので、マサキさんが部屋に案内——しようとしたところでシズルさんがユウキの腕に抱きついて部屋に連れて行こうとして、リノさんとコッコロさんが引き剥がしにかかった。

「どうやら、人が増えた影響で暫く拠点は賑やかになりそうだ。」

わたくし達は「ニヤルラトホテツプ教団」の皆様の拠点に活動の場を移すことになりました。

サレンさまには、わたくし達は無事であり、クエストで遠方に向かうため暫く帰らないことを伝える内容の手紙をお出ししました。と言っても、郵便局を介せばそこから追跡される恐れがございませうので、夜中にジョージさまが不思議な力で姿を消して直接郵便受けに投函されました。

暫く帰らない理由で嘘をつくことに心が痛みましたが、正直に伝えればサレンさまを始めとした「サレンディア救護院」の皆さままで危険に晒すことになってしまいます。申し訳ありません、サレンさま。この償いは、再会した後には必ず。

それから1週間程経過した、夜のこと。

「……ん！」

誰かが、わたくしの名を呼んでいます。

「……たん！」

もしか、この声は——。

「コッコロたん！」

「はっ!？」

わたくしが目を開けると、そこはどこかの庭園でした。

そして目の前には、声の主と思われる女性がわたくしの肩に手を掴み、顔をじつと見つめておられます。

「その声は……アメスさま？」

「ええ。ごめんなさいね。ぐっすり寝てるところを呼び出しちゃって」

そうおっしゃったアメスさまは、わたくしの頭を撫でると晶さまからの伝言を簡潔に伝えました。

曰く、『現実』<sup>あちら</sup>では半年以上の年月が経過している。

曰く、事態解決のために動いているが、何やら怪しい動きをしている者の気配を感じる。

「どうやら晶さまは、無事『現実』<sup>あちら</sup>の世界で目を覚まされたようです。そして事態解決のため、あちこち駆け回っていらつしやるとか。そしてこの情報は、ジョージさま達にも伝えるようにおつしやっていました。

「それと、晶からコツコロたんにお願ひがあるそうよ」

「わたくし個人に、ですか？」

「ええ。『アストルム』<sup>こち</sup>の最高権力者の協力を得て、事実を広く喧伝して欲しい。つて言つてたわ」

「そ、そのようなことをいきなり言われましても。一般市民であるわたくしにそのような事は……あつ」

ふと、わたくしの脳裏にペコリーヌさまのお顔が浮かびました。

そうでした。ペコリーヌさまの本名はユースティアナ・フォン・アストラライア。  
カイザーインサイト  
覇瞳皇帝を打ち倒し、ペコリーヌさまが本来の地位——お姫様に戻れば、世界中に事実を広めることができます。

「わかりました」

「ありがと。それじゃ、また夢の中でね。その時はお茶とお菓子も用意しておくから、ゆつくりお話でもしましよ」

そして。朝。

朝食の後、とても重要なお話があるということで、皆さまの視線がわたくしに集まります。

「……という情報を、アメスさま経由で晶さまからお聞きしました」

夢の中でアメスさまより教わった内容をお伝えすると、主さま、ペコリーヌさま、クリステイーナさまを除く皆様の顔が真つ青になりました。

「すまない。念のために確認させてくれ。『現実』<sup>あちら</sup>では半年以上の年月が経過しているのは間違いないんだな？ 半月でも、半日でもなく」

「はい。確かに半年以上とお聞きしました」

皆さまは席を立つとわたくし達に背を向けるようにお部屋の隅に移動し――

『お、え、え、え、え、え……』

「きゅっ!？」

いつぞやの主さまとミヤコさまのように、虹色の吐瀉物を吐き出されました。

吐くほどのショッキングな事実が先ほどの情報にあったのか。ある程度吐いて落ちて着かれたジョージさまに、その理由を訊ねてみました。

「あー、色々言ってもいまいちピンとこないかもしれないから……コッコロさんがリノさんと同じくらい年齢になれば分かると思う。半年間何もしないことのヤバさが」

「そういうものでございますか」

「そういうものなんだよ」

ジョージ達がゲーミング吐瀉物を吐いていた頃。ランドソルでは。

「ふわあく……おはよう……」

「おやおや、アンナたそ。今日はまた随分とお眠ですな〜?」

小説の執筆に夢中になった結果碌に眠れず、しかし空腹と朝食の匂いにつられて無理矢理体を起こし、リビングに顔を出す。

テーブルを見ればミツキ、ルカ、ナナカ、エリコは既に席に着いていた。

「また遅くまで起きてたの?夜更かしはお肌の天敵だって、前にも言ったと思うのだけれど」

じろり。と、医者らしい小言を口にしたミツキが睨みつける。

「すまない。しかし、我が内より湧き上がる創作欲には抗えず、つい」

「とりあえず、顔を洗ってきてください」

「洗面所までついて行ったほうがいいかい?」

「ふわ〜あ。大丈夫だ、問題ない」

姉御の揶揄う声を流し、冷水で顔を洗って目を覚まさせる。よし、あとは朝食を食べ

れば完璧に目が覚める。

——だがその予定は第三者の手でキャンセルとなる。

「おや、こんな朝早くにお客さんとは珍しいね。誰か心当たりは……無いか。ちよつと見てくるよ」

扉をノックする音を聞いたのか、玄関へと向かうルカ姐と入れ替わりでリビングに戻った。

『はい。……その鎧、もしかして【NIGHTMARE王宮騎士団】の方かい?』

『ええ。朝早く、それも朝食時に申し訳ありません。元【ニヤルラトホテツプ教団】の団員であるアンナという少女は、今いらつしやいますか?』

遂に来たか。

「ちよつと、アンナちゃん!」

私はリビングから自室へと踵を返し、クローゼットの中からコートと仮面を引つ張り出す。

1週間程前、団長から私宛に手紙が届いた。

内容は、『とうとう向こうに目を付けられたから、もしもの時はこの魔法を使つて拠点に逃げる事』

手紙に書かれていた魔法は一度しか使用できない片道切符且つ、四辻でしか使えない

という妙に演出に凝った面倒くさい魔法だった。けどちよつとロマンがあるからヨシ！ただ、情報漏洩を防ぐためとはいえ『水に溶ける特殊な紙』に書き、処分方法として水に溶いて飲むことを指示したのはどうかと思つた。

「いたぞ！追えー！」

「回り込んで囲め！」

窓を開けて飛び出せば、外にいた騎士に見つかり応援を呼ばれた。

だがこの区域の構造は熟知している。

道端にある木箱や樽を倒して追手に少なからず足止めを行い、或いは民家の屋根伝いに移動し、とにかく逃げ回つた。そして――。

「そこまでだ！ユースティアナ陛下の命により、貴女を連行する。大人しくご同行願おう！もし断るのならば力づくで……！」

四方を「NIGHTMARE王宮騎士団」が取り囲む。穩便に済ませようと説得の言葉を口にはしているが、同行するつもりは毛頭ない。既に私は逃走経路を確保しているのだからな！

「にやる・しゆたん！にやる・がしやんな！」

詠唱すると、足元に六芒星を囲むように円陣が出現する。

「転移するつもりか!?!」

「そうはさせるか！」



騎士達が私を捕まえに来るよりも早く、視界が暗転した。

「向こうも動き出したようですね」

「ええ」

拠点の一画。「ニヤルラトホテツプ教団」の元団員達が転移した時のスペースで、ネネカさん達と今後の行動について相談を始めた。

話によれば、「NIGHTMARE王宮騎士団」が元「ニヤルラトホテツプ教団」の団員を捕縛しようとして動いているらしい。前もって手紙で警告しておいたのが功を奏したのか、当時『アストルム』にログインしていた団員36名のうち捕縛された者は1人もいない。全員揃っている。

「……『思い立ったが吉日』。今日の日没と共に攻め込みましょう」

「成程、寝込みを襲うのですね」

ネネカさんの言い方に凄まじい語弊があるが、実際そうだから否定できない。

「しかしジョージ、彼らの武器はどうするんですか？見たところ全員丸腰のようですが」  
「倉庫にある武器を配ります。下手な武器屋より数も種類も取り揃えてあるので、間に合う筈です」

「……わかりました。「ニヤルラトホテツプ教団」の皆さん。皆さんに武器を配りますので、私について来てください」

ラジラジさんを先頭に、団員達がそろそろと部屋を後にする。

「姉上。今夜は姉上の大好きな宴が起きますよ」

「そうだな♪とても嬉しいし、とても愉しみだ」

拠点の大広間。

「休めッ！ 気を付けッ！」

ジョージの声に従い、「ニヤルラトホテツプ教団」の団員達が姿勢を正す。もはや「教団」というよりも「軍団」に近いな。壁際で私と坊やたちはそれを見ていた。

「ユースティアアナ陛下より、直々のお言葉を頂戴する！ 一同、静聴ッ！」

ティアアナは彼らの前に移動すると、一礼して口を開いた。

「「ニヤルラトホテツプ教団」の皆さん。現在、ランドソルには私の名を騙り、この国を支配している魔王がいます。彼は人々から私の記憶を奪うだけでなく、大切な仲間までも奪っていききました。これ以上、彼の悪逆非道は許せません！ 私から奪った全てを取り返すため、どうか、皆さんの力を貸してください！」

『イエス、 マム』

【ニヤルラトホテツプ教団】の団員達は口を揃えて賛同の声を上げ、ティアナに従うという意思を示す。

そして、ティアナが作戦の内容を壁に書かれた城の全体図を用いながら、説明を始めた。

「まず、皆さんには王都で騒ぎを起こし、【NIGHTMARE王宮騎士団】の注意をひきつけてもらいます。それに乗じて、私達はラジラジさんの能力を使って城内に侵入。洗脳装置の破壊とキヤルちゃんちゃんの救助を行う2チームに分けます。そして洗脳装置を破壊し、キヤルちゃんを救助した後、私が城の外に出て戦いを止めるように合図を出したら終了です。但し、皆さんの役割はあくまで陽動です。決して誰かを殺したり、誰かに殺されたりしないでください」

誰も殺すな。というのには私としてはちよつぱり残念だ。本気の団長と、本当の殺し合ができるものだと思っていたからな。……まあ、ティアナから直々に『やるな』と言われたら従うしかない。私もいい大人だし、我慢するでしょう。

「作戦は日没と共に決行します。それまで各自、作戦に備えてください！」

『イエス、 マム』

日が沈み、空に月と星が顔を出し始めた頃。

「では、『ニヤルラトホテツプ教団』捕縛部隊の指揮は君に任せたま。オクトー君  
「りよーかい」

「『ニヤルラトホテツプ教団』の団員達が転移した事から魔力の流れを辿り、大凡の転移位置を確認。そして都市防衛と捕縛のために人員を選別。再び転移されないよう魔道具を調達し、闘争に備えて武器の整備を進めていたら、すっかり夜になってしまった。

「じゃ、行つてきまーす」

オクトー君に続いて、捕縛部隊に組み込まれた団員達が城を後にする。

「(……しかし、今回の指令は考えれば考えるほど奇妙だ)」

オクトー君の背中を見送りながら、私は思案していた。

まず、『ニヤルラトホテツプ教団』の捕縛を命じられた理由は、陛下が彼らを危険な邪教徒だと判断したことによる。

一時期彼らの拠点で寝泊まりしていた身としては、彼らの思想・信仰に危険な要素はどこにも見当たらなかった。

そもそも、陛下は何時何処で彼らの教義を知ったのだろうか。城に自由に入入り得る者に『ニヤルラトホテツプ教団』の団員でもいたのか？であれば、その人は捕縛され

ている筈だが、誰も捕縛できていない。全員の逃亡を許してしまっている。

「(うーむ……何か、致命的な見落としをしている。ような気がする……)」

その根拠は何なのか。その見落としとは何なのか。出てこない解党に頭を悩ませ、首を捻っていると――。

「国盗りの時間だあああつ！」

夜の静寂を打ち破るような声と共に、法螺貝の音が鳴り響いた。

## 混沌のランドソル

『報告します！現在、謎の集団が各関所に向かって突進しております！』

「特徴は!？」

法螺貝の音が鳴り響いた直後、関所から通信魔法で私に報告が飛んでくる。

『黒づくめに仮面——「ニヤルラトホテツプ教団」で、グワーツー!』

報告を終えるよりも、騎士の身に何かが起きる方が早かった。

「作戦を変更する！捕縛部隊はこのまま都市に侵入してきた【ニヤルラトホテツプ教団】を捕縛！都市防衛部隊は城の防衛と住民の保護！但し、ジョージ君を見つけた時は私に知らせること！彼の相手は私がする。行動開始!」

『了解!』

私の指示を受け、皆が即座に行動を開始した。

「(国を盗るだ?!)ジョージ君、君は何を企んでいるんだ……)」

一方、王城では。

「着きましたよ。皆さん、怪我はありませんか?」

混乱に乗じて、ラジラジさんの権能を使って私達は城の裏手に転移してきました。

とはいえ、城内にも少なからず警備の兵士はいるので――。

「何も」

「オラアツ!」

「ぐはあっ!?」

ある時はダイゴさんが殴り飛ばし。

「すまない」

「へぶっ!?!」

ある時はマサキさんが背後から投げ飛ばしてダウンさせていききました。道中に仕掛けられている罠も、洗脳の絡繰りを探っていたネネカさんが把握していましたが、罠に掛からないルートでスムーズに進んでいきます。

洗脳装置があるのは王宮の地下の一面。恐らく『カイザリンサイト覇瞳皇帝』が極秘に増設したと思われるそこに向かうため、ラジラジさん達とは別行動をとることに。

玉座の間までの廊下を走る中、ネネカさんの言葉が私の脳裏を過りました。

『あれだけの威力の魔法を放ったのです。いかに彼と言えど、かなり消耗している筈です。それも1週間やそこらでは回復しきらない程度には。ならば、現在玉座には彼の代

理人がいるでしょう。それが誰なのか……言わなくても分かりますね？」

カイザーインサイト

『覇瞳皇帝』の代理人で玉座に座っている人物。それに心当たりがない程、私は能天気ではありません。だけど、同時にその人物であって欲しくない、と思ってしまう。

「ペコリーヌさま」

「ペコちゃん」

玉座の間に繋がる扉。扉に手をかけるか悩んでいた私の名前を、コツコロちゃんとうきくんに呼ばれました。

私はもう迷わない。

迷っていたせいで、こんなことになってしまったのだから。

「……行きますー」

覚悟を決めた私は、扉に手をかけて開けました。

玉座の間に一歩足を踏み入れた瞬間――。

「っ!？」

私に向かって放たれた魔法を、剣で弾き飛ばす。背後はウキくん達がいますし、前にそのままお返しするなんて以ての外。なので飛ばした先は、天井。一部が崩れ、床に瓦礫が零れ落ちます。

今の魔法を放った人影は、私達に杖を向けたまま玉座からゆつくりと立ち上がると言



い放ちました。

「……来たわね。陛下に牙をむく反逆者」

綺麗な黒髪と、種族特有の尻尾と耳の生えた小柄な少女。

口は悪かったけれど、人の良さが隠し切れなかった口調も一変して、冷酷かつ無慈悲に。

「キヤルちゃん……今、助けます!」

キヤルちゃんは助ける。『カイザーインサイト覇瞳皇帝』も倒す。

迷いを捨てた私は誰にも負けないうし、止まりません。

王城前広場。

「ふんっ!」

「ぐああっ!」

【NIGHTMARE王宮騎士団】の兵士の攻撃を十字槍でいなし、石突で突き飛ばす。

「このおっ!」

「おっと」

「うわあっ!」

横からの挟み撃ちをバックステップで回避し、騎士達をぶつけさせる。

「はっはあ♪どうした団長♪今の私は国家転覆を企む悪党だ。そんな生温い攻撃で止められるなどと甘ったるい考えは捨てて、殺すつもりで来ておくれ♪」

「だったら私の質問に答えて欲しい！仮にも民を守る【NIGHTMARE王宮騎士団】の副団長であるクリスちゃん、なぜ国家転覆などを企む輩に加担した!?そしてジョージ君、国を盗るとはどういうことだ!」

「答えてあげるとも。この私を力で屈服させることができたら、なあっ!」

「ぐっ!」

俺から少し離れたところでは、クリス姉とジュンさんがぶつかりあつて物理的に火花を散らしている。

「はああああああっ!」

「あーらら」

不意に、聞き覚えのある声と聞き覚えがあまりない声が同時に俺の耳に響いた。

振り向けば、剣を構えて俺に向かって突撃してくるサレンさんと赤髪の女性の姿が。

剣が振り下ろされるよりも少し早く、周りにいた騎士の肩を足場にして跳躍し、民家の屋根に逃げる。サレンさんのほうはともかく、片方の大剣も同時に受けるのに槍では心許ない。

「もらったあああつ！」

と、俺の飛び乗った民家の屋根に身を隠して奇襲をかけようとしていたのか。以前会った狼の獣人族のお嬢さんが大剣を振りかぶっていた。

すれ違うように俺は彼女の攻撃を回避し――。

「あれっ!?!あたしの剣が無い!?!」

彼女の手から剣を奪い取る。武器にも楯にもちようど良い大きさと重量だ、これと槍を合わせた一刀一槍でもう暫く戦えるだろう。

「すまない。ちよつと借りる」

「ああっ！お前、あたしの剣返せえっ！」

顔を怒りから赤くしたお嬢さんの声を無視して屋根から飛び降り、序に下にいた騎士を踏み倒す。

「お待たせしました、サレンさん。第2ラウンドといきましょうか」

剣の切っ先を向けて少しかっこつけて言っているが、これはある衝動を必死に抑えるため。

これだけ人が大勢いる状況で俺は、『カザサイオンサイト覇瞳皇帝』がユースティアナを名乗り、玉座に座っているという事実――ヒューマンの両親の間に生まれた嫡子が獣人族であるという矛盾を指摘したい。それもどっかのゲーム会社の社長のようにつつてみたい！

「ただどそれは良くない。なぜならそんな事をしてしまえば、この騒動が治まってしまうから。」

「俺達の役目はあくまで陽動。そのためにも、この騒動はできるだけ長引かせなければならぬ。」

「クリス姉が我慢できているんだ、俺が我慢できなくなつてどうする。」

「ジョージのいる区画から少し離れた、都市南東部。」

「おらあつー！」

「ぐうっ!？」

「襲つてきた騎士の一人の足元に潜り込み、棍棒で脛をぶん殴る。」

「このおっー！」

「おつとと」

「反撃とばかりにあたしを取り押さえようとする騎士の頭を、跳び箱のように跳び越える。」

「危機一髪。そう安堵していたあたしの耳に――」

「はあああああつー！」

懐かしい声が響いた。

「伏せて！」

着地した瞬間を狙った突きから、「ニヤルラトホテツプ教団」の団員が庇った。剣が防具を掠めたのか、金属の擦れる不快な音が鳴る。

「ちっ！ヒヨリ！」

「うん！」

声の主の背後から、新たな人影が飛び出してきた。大きく跳躍し、拳を振り上げた。それは団員に狙いを定めて――

「ふんっ！」

「うわあっ！」

「ヒヨリちゃん！」

他の団員に腕を掴まれ、逆再生でもしたように放り投げられた。落下地点にいた誰かが回復魔法をかけたのか、柔らかい光が煌めいた。

「レ……」

親し気に声をかけそうになったところで、言葉を飲み込んで口を塞ぐ。

あたしに着地狩りをした青髪の魔族の少女はレイ。レイの背後から飛び出した猫の獣人族ビーストの少女はヒヨリ。そしてヒヨリに回復魔法をかけたおっぱいの大きいヒューマ

ンの少女はユイ。

あの3人は『アストルム』が再構築される前のユウキの仲間。そして、『ソルの塔』の頂上で『カイザラインサイト覇瞳皇帝』と戦いを繰り広げた、「トウインクルウィッシュ」のメンバー……つまり、ユウキに並ぶ今回の異変に関する重要人物。

特にユイ。この異変の元凶の目鼻立ちは、あいつと瓜二つだ。ジョージ達とギルドでクエストが無いか探している時、あいつの顔を見た時に勘違いから殺気が漏れてしまっただくらいだ。

「(でも当の本人達が記憶を無くしているんだよなあ……まあ、今は『カイザラインサイト覇瞳皇帝』を玉座から引きずりおろすための陽動作戦に専念しないと。これが終わったら、この間殺気に向けちゃった件について菓子折りでも持って謝りに行こう)」

今やるべき事に専念するため、あいつらの記憶云々については頭の片隅に置いておき、棍棒を振りかざして突撃した。

# 皇帝降臨

「(……随分、騒がしいわね)」

王城内部。その最奥に極秘に増設させた空間に設置された洗脳装置。その下で住民やシャドウから吸収した生命力を体に馴染ませていた私の目に、外での騒ぎが情報という形で映る。

これが私の権能『霸瞳天星』。この世界をデータとして閲覧するだけのシンプルな能力だけど、私は閲覧したデータを基に相手の次の行動を予測、若しくは再現することが出来る。

「〔NIGHTMARE王宮騎士団〕は何を手間取っているのかしら。『レジーナゲッシュ誓約女君』とノウエムがいるとはいえ、相手は精々40人程度。ランドソルの他のギルドも参戦しているというのに、1人も捕縛できないだなんて。それを言ったらキヤルのほうもだわ。洗脳を強めにかけるついでにステータス増強用のアイテムを使ってドーピングまでしたのにこのざま」

都市ではジョージ率いる「ニヤルラトホテツプ教団」が暴れまわり混乱状態。王城ではユースティアナ率いる「美食殿」と晶の部下2名を相手にキヤルが苦戦しているのが読み取れる。

キヤルはユースティアナに絶え間なく攻撃を繰り返しているようだけれど、どれも急所を外している上に威力も低い。あの中で最年少である、長老の娘ですら弾ける程度。思った以上に【美食殿】のメンバーに情が移ってしまったっていて、無意識にブレーキをかけてしまっているみたいね。前のループで同じ様なシチュエーションになった時よりも強めに洗脳魔法をかけたのだけれど、失敗だったようね。

データの上ではユースティアナ達はキヤルに反撃せず、攻撃を壁や天井に弾いて説得を試みている。彼女達からすれば裏切り者であるはずのキヤルをそこまで気に掛けるなんて、中々のお人好しのようね。甘ったるくて吐き気がする。

「まあいいわ。それよりも、そろそろ『メタモルレクザント変貌大妃』と『キングリープ跳躍王』がこの部屋に来るわね。それも、それぞれのプリンセスナイトを連れて」

この上にある洗脳装置を破壊したタイミングで、床を崩落させて彼らを地下深くに落下させる。それも、以前やったように結界を構築済みだから脱出するには壁を登る以外の方法は無い。時間稼ぎにもなって一石二鳥だわ。

「（それじゃあ、いまいち役に立っていない【NIGHTMARE王宮騎士団】に手を貸すとしましょう。最後は私が神になるための糧になるんだもの、少しは活躍してもらわないと）」

私は手元にコンソールを出現させ、画面を操作した。



王城前広場。

『こちらアンナ！こちらアンナ！聞こえるか!? 団長』

「ぐはあつー！」

「はいはいこちら団長。何事？」

拝借した剣の峰で騎士の頭をぶん殴ってダウンさせ、通信魔法に應對する。声からしてかなりの緊急事態のようだ。まさか捕まったとか？

『モンスターとシャドウが出現した！それもかなりの数が！』

彼女の一報に連動するように、地面に魔法陣のような文様が出現し、そこからモンスターとシャドウが湧いて出てきた。

十中八九『カイザーインサイト覇瞳皇帝』の仕業と見て間違いない。何を目的にやったのか推測するのならば、俺達を疲弊させるのが目的か。

「【ニヤルラトホテツプ教団】各員に伝達。国盗りの邪魔だからモンスターとシャドウを殲滅せよ」

『イエス、サー』

通信魔法で全員にシンプルで分かりやすい指示を送り、俺も應對に向かう。……と、その前に。

「これ、返します」

「あっ!?!おい待て!」

剣の持ち主である狼の獣人族のお嬢さんビーストに投げ返して素早く退散。だって、キャッチすると同時に斬りかかりそうな雰囲気だったから。

「■■■■ーッ!」

槍を背負って刀を抜き、猿叫を上げながら目に付くモンスターとシャドウ合わせて10体ほどの首を刎ねる。久しぶりに、それも思いつきり刀を使って戦うのは実に気持ち良い。

「そらそらそら!」

クリス姉も嬉々として大剣を振るい、巻き藁でも斬るように敵をなぎ倒していく。

「くっ!」

そして、どさくさに紛れてジュンさんに攻撃していた。

「姉上。遊んでいないで戦闘に集中してください」

「集中しているとも♪私の大好きな乱闘になって少々テンションが上がっているがね。

そおら!」

大剣を振り回し、斬撃の嵐となったクリス姉がモンスターとシャドウの群れをなぎ倒していく。おっと、こうしてはいられない。『覇瞳皇帝』を打倒するほどの強大な敵との

戦いに備えて、少しでも経験値を稼いでレベルを上げないと。

「ジョージ君！」

と、そこでジュンさんに呼び止められた。

「何でしょうか。用件は手短にお願ひします」

「なぜ国を盗ると言った？まさか自分が王になるつもりじゃないだろうな？」

「いいえ」

「だったら、何のために国を盗ると言ったんだ!?陛下の何処に不満があるというんだ!」

「何もかもですよ。それじゃあ」

「待て！まだ話は終わって……ああもう！姉弟揃って人の話を聞かないんだから！」

一方。

『ヒヤッハーツ!』

『逃げるモンスターはただのモンスターだ！逃げないモンスターは良く訓練されたモンスターだ!』

『命はいらん！首を置いていけえ!』

「うーわ、やってるやってる」

現状を俯瞰して確認するため、近くの共同住宅の屋根から戦場を見下ろす。

乱戦状態となっているランドソルでは「ニヤルラトホテツプ教団」のメンバーが雄叫びを上げながら、モンスターとシャドウを殲滅していた。

魔法と物理のツープラトンアタックがモンスターとシャドウに襲い掛かり、手足や首、中身モツなどの体のパーツを辺りにまき散らしていた。中には魔法で細胞の一片まで消し飛ばされ、「灰になっていた。どっちが敵かこれもうわかんねえな。」

「(こんなヤベー奴らと『ソルの塔』で戦うこともあったかもしれないのか……絶対に嫌だ)」

あんな狂戦士軍団と戦うくらいなら七セブンクラウンズ冠に喧嘩売ってボコられる道を選ぶ。いや、あたしと天楼覇断剣は無敵だから、あいつらを返り討ちにできる。けど、相手にするのは精神的にキツイ。黒ずくめの狂戦士軍団が武器と魔法振り回して襲ってくるのかホラーでしかない。

「……ソルの塔に来たのが、ユウキ達で良かったよ……」

心の底からの安堵の息を吐き出して、気持ち切り替える。

「……まあ、それはそれとしてあたしも暴れるか!」

屋根から飛び下りながら、宙に手を伸ばす。

「現出せよ!——天楼覇断剣!」

着陸と同時に魔物を真つ二つに割り、あたしは突撃した。

ランドソル王城内部。

「これが洗脳装置ですか」

「ええ」

トラップを解除し、回避して辿り着いた区画。

人一人入りそうな大きさの装置と、装置を稼働させる魔力——ランドソルの住民が入った蕾のような形状のタンク。それらは太い蔓のようなケーブルで繋がっています。

「マサキ、ダイゴ、我々はタンクの中身を取り出しましょう。ネネカ、彼らを安全な場所に運び出すため、分身を数名作成しておいてください」

「はっ」

「おうー！」

「分かりました」

指示通り、ラジラジ達がタンクから住民を取り出します。息はありますが、彼らの目は閉じたまま。恐らく、魔法で眠らされているのでしょう。それを私の分身達が担ぎ、城の外へ。この区画に来るときの道を巻き戻すように、運び出しました。

「さて。マサキ、ダイゴ、本体を破壊しましょう。準備は？」

「いつでもできてるぜ！」

「右に同じく！」

「ネネカ。貴女は万が一に備えて、下がっていてください。装置を破壊された時に発動するトラップの類が無いとは限りません」

「ええ」

ラジラジ、ダイゴ、マサキの3名は洗脳装置を取り囲みました。そして武器を構え、闘志を宿した瞳で睨みつけ。

「ふっ！」

「おらあっ！」

「ふんっ！」

それぞれが放つことのできる最大火力を以て、洗脳装置を破壊しました。

「おろ？」

モンスターとシャドウも粗方殲滅したところで、地面が揺れた。大型のモンスターが倒れたことによる揺れでは無い、地下で何かが大爆発を起こしたような揺れ方だ。

『ジョージ。聞こえますか?』

と、ラジラジさんから通信魔法で俺に連絡が来た。

「はいこちらジョージ。今の揺れは一体?」

『結論から言えば装置の破壊は完了しました。しかしそれと同時に床が崩落し、我々は落下してしまいました。現在、巨大な蜘蛛に変身したネネカに運んでもらっています』  
その連絡から少し遅れて、王城の方から巨大な光の柱が現れ、城の一部を吹き飛ばした。

随分速い到着だな。そう思って振り向いた先にいたのは――。

『それともう一つ。落下する途中ですが、装置の下に繭のような物を発見しました。あれはおそらく――』

『カイザーインサイト『**覇瞳皇帝**』が入っていたんでしょう?その連絡、もう少し早めに欲しかったですね』  
『まさか……』

そのまさか。俺の目線の先には、人影が浮かんでいた。姿形は、俺達を戦略級魔法で亡き者にしようとしたあの時のまま。

「……私の眠りを妨げた罪は重いわよ?」

魔法で声が都市全体に響くようにしたのか、それなりに離れた距離でもよく聞こえた。その一言に含まれる威圧感によって、辺りは静寂に包まれた。

『カイザーインサイト覇瞳皇帝』が腕を横に振るうと、巨大な鎧が4つ出現した。外見から、あれは以前出現した『リビンググメール』と見て間違い無い。回収が終わる前に破片を確保していたようだ。

「せいぜい足掻きなさい。そして実力の差を知り、絶望しながら死になさい」

勝利を確信しているのか、『カイザーインサイト覇瞳皇帝』は勝ち誇ったような声で俺達に言った。

「【ニヤルラトホテツプ教団】各員に伝達！」

俺達が達成する目的の1つにして障害を前に、指示を出す。……『アストルム』をゲムムとして楽しんでいた頃に、ボス戦の前に出していた指示を。

「生き残りたくば死人になれ！」

『イエス、サー！』